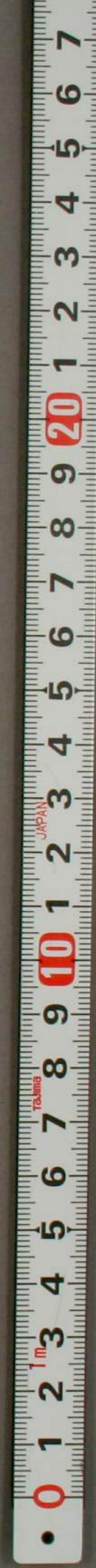


ル 4
3137
4



日光山志卷之四

目録

- 華嚴院 旧圖
- 巫女石
- 中禪寺別所
- 古禪院
- 大香居
- 三層塔
- 中禪寺院北并湖水園
- 拜殿
- 唐羽香居
- 岩燕園
- 半石
- 什物古磬 旧圖
- 中禪寺古棟札写
- 護摩堂
- 棟枕護摩所
- 石枕籠
- 本北觀音堂
- 摩伽陀天堂
- 本戸門
- 冠木門
- 男衾山禪頂小屋
- 不断火
- 元大屋敷像
- 鐘樓
- 古空
- 三社権現本社
- 戒壇堂



松禪頂

茶花教種

古碑疏

弘法大師記文

中禪寺私記

武村系

慈悲心考圖

要莊樹

男辨山並古考

勝道上人之神教向と物（一）の圖

如室山圖

有湖

南岸橋

舟渡

寺崎

石楠花園

日輪寺回跡

上野崎

子手崎

子手系

子手砂利

富蒲沼

赤岩

獨瑤壺

龍頭池（一）圖 其二

地獄榮屋

本又寺回跡

顯釋坊（一）

狛山

狛石

四條寺回跡

法華密嚴寺回跡

持法橋寺回跡

般若寺回跡

梵字岩

若松崎

老松崎

標芽系並古考

戰場系（一）

赤沼系圖

其二

白駒

野塚池

西湖

葵湖

特籠池

魔湖

佛湖

須沼

湯湖

中禪寺温泉（一）圖

湯平

令精味

赤白根山

赤白根山

白根山圖

肉菴蓉園

白根葵園

栗山（一）十村

同深谷岩茸五園

赤く温泉

龍留（一）荒井

尾尾峠

尾尾（一）十四村

新山（一）濫觴

尾尾山中洞と砂石と沙汰（一）の圖

山中洞（一）堰圖

不動沢

銀山

庚申山圖

日光法石名産
金剛石 飛石 磁石 茶枝 漆木
新穀 飲食料 細工物

日光山志卷之四



植田孟縉編輯

華嚴院 此飛瀑を中禪寺湖水より落来る水路九七八町流れて
はより至るを水路を又一派乃河の如く幅十間餘或を七八間の所
も有り佐南湖より田六町流れて来りて板橋と架せり是を南原橋
と唱ふ長十間許木の橋を秋演への西路あり又を足尾へ掛り上州
筋より詣る所の足尾峠乃頂上より岐路を還ると九二里許の嶮
と凌て爰へ来りてまゝ本道と經り中禪寺へ詣る所の大平の道根
小左へ折り行へき平坦の小路あり九六六町餘とたゞ是よりきて此
飛瀑の趣不なる是を大谷川の水源なり云七十丈と云ふは瀑を
東園寺一の瀑より一瀧に幅二間餘瀧下を人遊乃かよふ所あり

華嚴龍



華嚴瀑布圖

王冕寫

このゆゑに瀧を眺むと、水は高く激しく、二三十間程も東寄の懸崖に危岬と云ふ危岩あり、夜霧を打て、雲霧の上へ下へ、激勢遙々下る水烟を雲盤濁と云ふ、かちがう、華嚴滝と名附く、縁記より此山中有瀑則湖水流汎青巒高崒紅日早照清瀧近遠岩上繁花芬々恰如涵錦似嚴瀧因名華嚴瀑云云、此華嚴瀑あるゆゑ又深沢の方等滝般若瀧の名を起す

冠本門

中禪寺境内入口なり、此門乃名匠合門と云ふ

巫女石

華嚴滝の傍にあり、其がら巫女の立つ所あり、石と化したるいりれを巫女ハ神不信あるまのなれど、尚山を牛馬女人

牛石

冠本門より路傍にあり、牛の跡あり、七尺六寸

六尺許の石、三尺程も、巫女石の如く、牛の跡あり、上へ牽来するの迹あり、曰く、是すくく石と云れる由、鼻と云ふ、此

男辨山禅頂小屋

毎年七月朔日より同七日朝を禪頂する行人數

子登山、此小屋に籠り居て種々行法を修し、中禪寺上人と云

流法乃内より年番に當る僧先達、七日乃早朝より、此山に

七月朔日此所を登れる、以て十八日別当、垢籠をとり、日行

する事終て、此所へ坐るとなり、初日より七日を宿

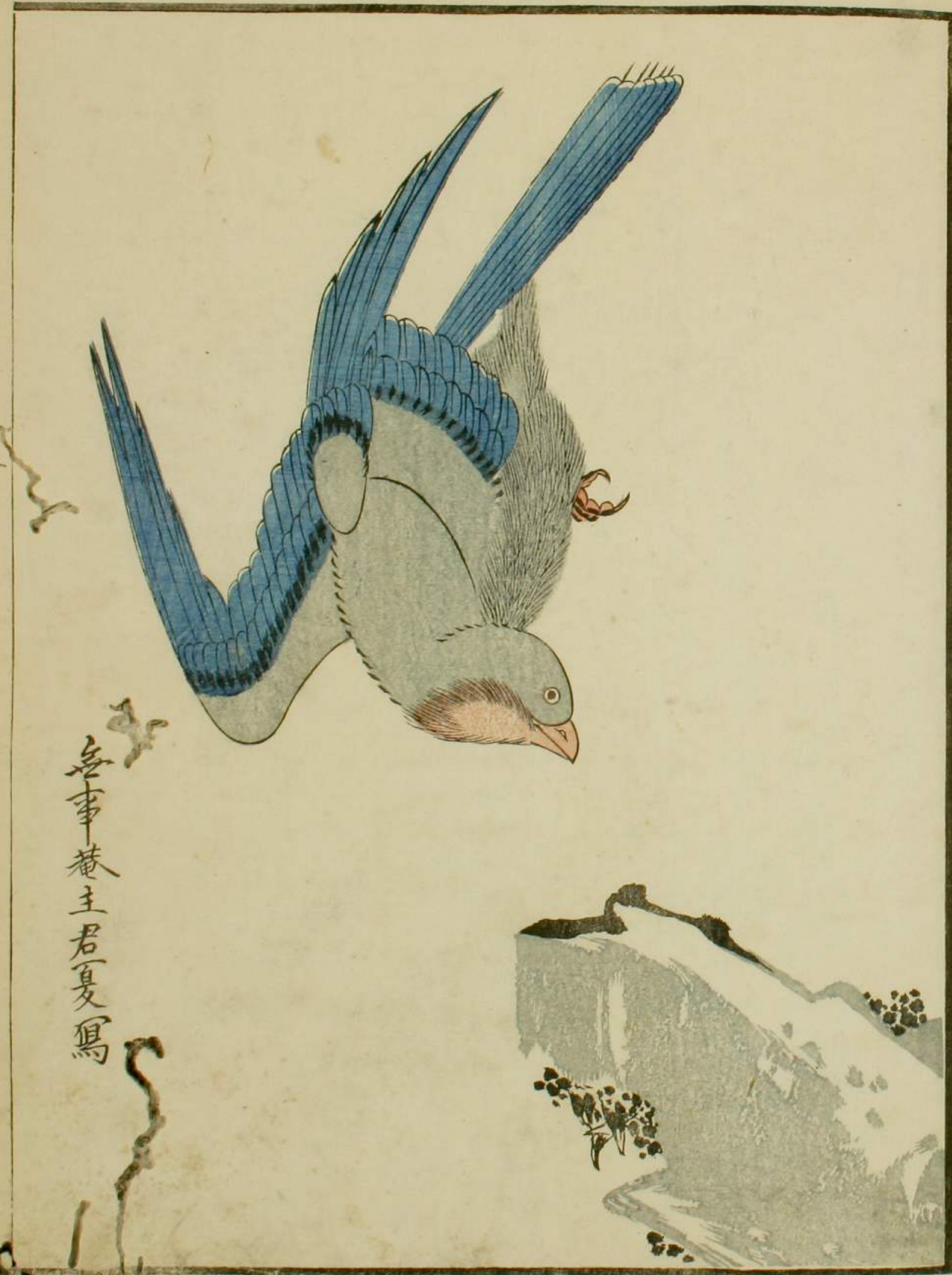
所門、古方より下り、此と云ふ小屋數九、二十棟、毎區別、番附

く、又指番を有て、湖の邊より、吾居乃、最後或を別所の傍に、修

小菰在り

中禪寺別所

之寺塔乃、東寄より、弘法大師の記文を考るに、勝道上人



鳥事菴主君夏寫



山岩燕

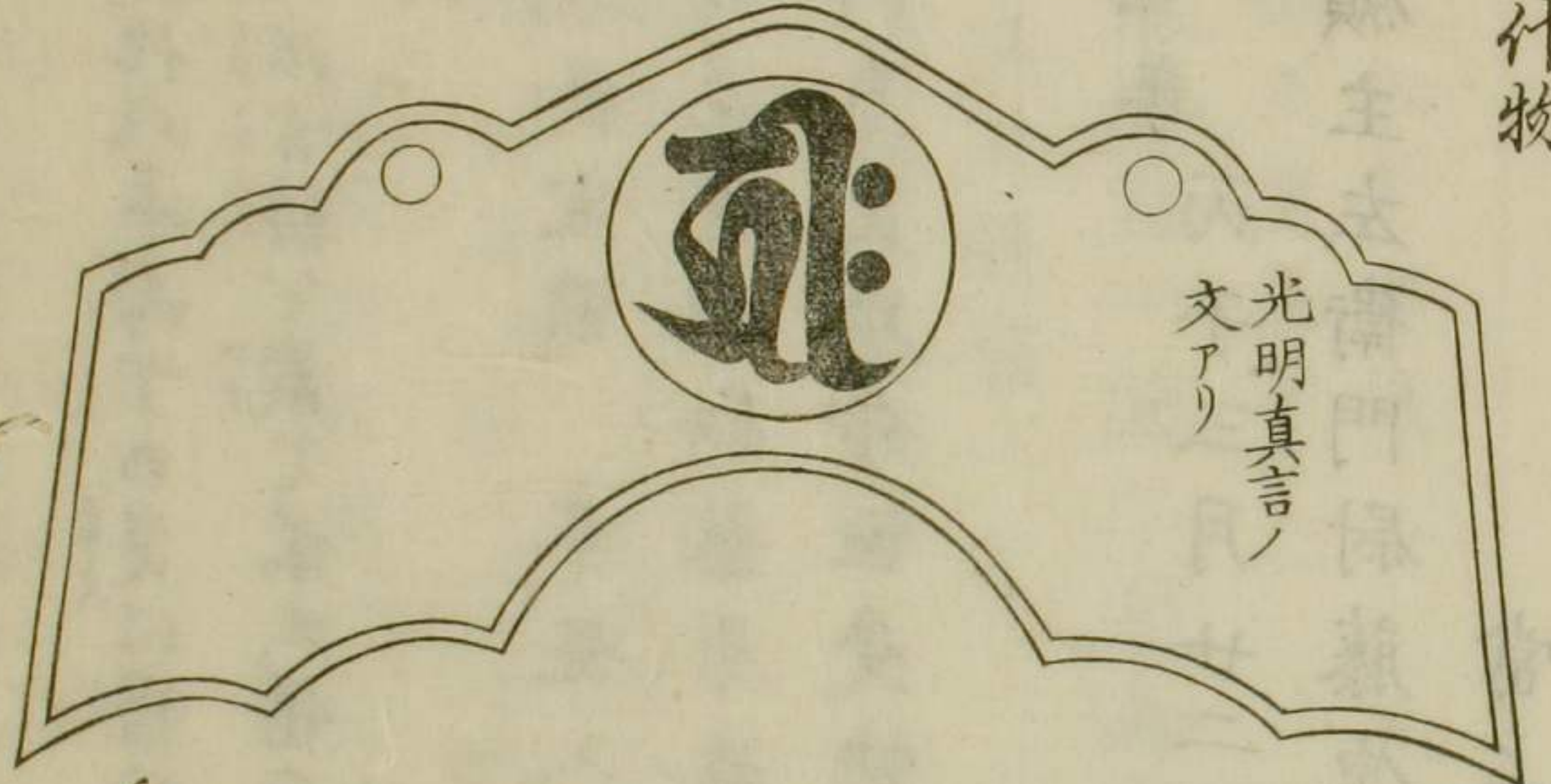
華巖瀑の峻谷に巢ひ常に窟間を
 回翔す老の燕よりけし大くして尾
 二ふさげは尾先小針の如きものなり

延暦七年四月宅山せうり場庵を遊舟の氷溜み移すとつるに其時上人
奉を開建又補陀洛山神宮寺と辨此上宮の路ありといふ此中
禪寺の称号ハ起せりといふ建神宮精舎辨中禪寺と云くなくより一山乃
上人職のりのはる多限るく山麓にて寺勢を司りしかど寛永二年ハ
建るる是より浄奉院の浄持とを建る由今も一山平徳の内務形は
よハ一坊を人浄奉坊の市家来を人宛領番一介に下給一商人住り又
一坊の内より演説といふ七年留小勤る由又浄官乃社家宅も享福乃
次第をゆく之社控現の社勢成司るといふ
不断火 尚別所よりハ開闢に束火を絶すとなく庫裡の火居煙裏乃
中ハ木材をふはべ垂冬夏絶ざる由去人ハ神代よりりの火ありとい
ハ一山日光山内を初め町々乃家ハも竟初爰乃火をめて各ハ家も
絶ざるやうに取計ふ去風ありといふ

四ノ西

中禪寺別所什物

磬の圖



光明真言ノ
文アリ

奉施入

男躰權現

建保五年丁

金剛佛子

浄智房

献宣生年

六十三

大工藤原

兼則

古鐘の銘

此古鐘を文化八年丙丁の災に罹りけり。其時九年、
と銘する時此古鐘を載て前大僧正凌雲沙門尚詮と銘あり其銘
文茲に略し

日光山權現御宝前 奉施入鑄金一口事

右志者爲左衛門尉藤原政綱北方藤原氏并所生
愛子等御息災延命恒受快樂心中所念決定成就
也

建保三年

丙子三月廿二日

願主左衛門尉藤原政綱

當上人覺音房

中禪寺古棟札寫

人王八十四代
順德天皇御宇

藤原國綱妻子
景綱入道妻子

奉建立一間二面御殿一字

征夷大將軍
源實朝公御代

宗綱入道妻子
親綱入道妻子
藤原有房妻子

建保五年丁丑四月十八日

同六年戊寅七月十九日

鎮守之地頭

結縁衆左衛門尉藤原朝政

古棟札保延久壽永曆文治建久皆史より後も造營の每事数多
る由志悉を記しが、仍て略す

中禪寺走大黒影像



走大黒影像 此靈像の来由を尋る小姓昔城華坊と稱する衆徒中
 禪寺の上人を尋りし時毎歳秋に至り何方よりとも初途に一丈乃
 嵐粟稗の種をくわへて来り別所を畝に植へたる人境をき山中に粟稗
 の乃べき事かしく上人不思議と思ふ是は彼龍の足小糸を付く事
 跡と慕ひ山の麓に至りこれに人家あり夕日依りて此地に中禪寺

の社外とす更に系代好て見出たる所由是より足尾の社と名
 名付しとかや上人初奉是乃思をきて蒙て大黒天とを祀ひ
 寺にうつり大黒天を十二支の子とて至るを放ありとぞ亦不思議
 なるゆゑは彼龍乃形相自然に化し大黒天乃号密を現せり
 像をくふ乃くち有とく時乃上人是を彼之利大黒天と稱す
 寺に崇信するもの中龍をくはるるを奇禱ありゆ禱てかそふべの
 らは是るといふに遂に遷乃我れりし亦假字に彼之利と書すの
 別は秘密の事ありと我ら道を海上より船の途に是て暴風を免
 ずて水難を遇ざる謂を以て船中乃守護神とを名をせり是て一切
 の乃お龍の伝を乃威靈智も間以て士農工商とを免し不願乃
 我れ統する子老田くみ出とありは故に福祿守護の神と稱すは
 是の世に像を大黒と稱する事ありと一員貧窮の荒生を福徳と

五ノ二ノハ疾病の元生を療養と云へ三ノハ造魚の元生に云へ
と云へ四ノハ經命此元生に云へ延壽と云へ六ノハ愚癡の元生に云へ
戒年ノ後云々との誓願ありと云へ

廻國雜記云此山の之三十里中禪寺と云へ檀越ありと云へ
して色香し侍る今宵ハと云へ十ニ教と云へ月もハ清くおすされ侍り
き漸漫たる湖水侍り秋の深と云へ所ハ紅葉色と云へおすはひく月
み映し侍るを毎にのりて

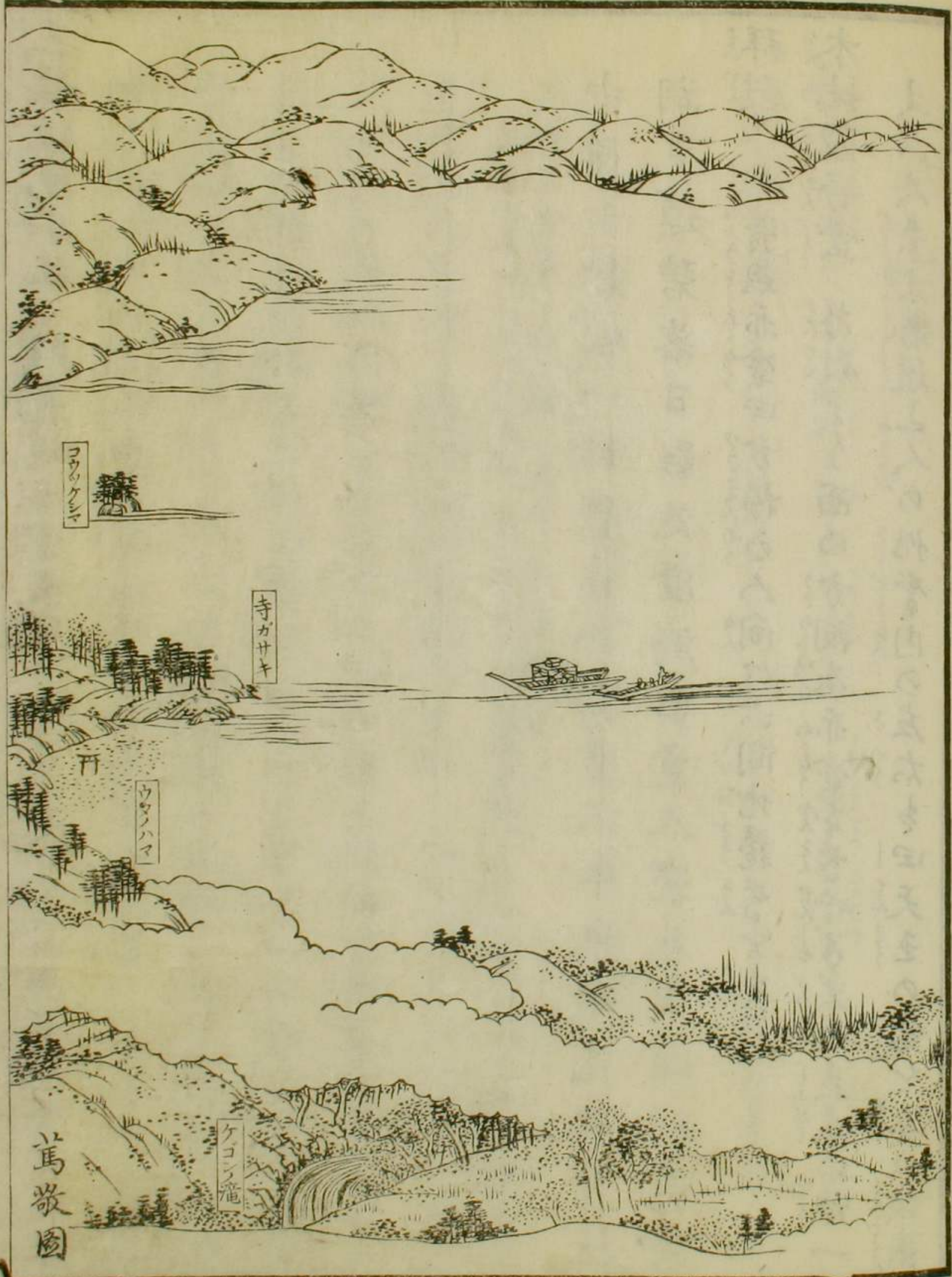
雲ノ宿乃うこれ深きお舟と云へ紅葉散らばり一月と云へ侍るうの
聖日中禪寺と云へお舟と云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ
と云へお舟と云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ侍るうの
お舟と云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ侍るうの
お舟と云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ侍るうの

お舟に云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ侍るうの
お舟に云へ侍るうの紅葉散らばりお舟と云へ侍るうの

大鳥居 唐銅湖あり建て茲より石階をせり平路よりまへ石階
二ヶ所と上りて觀音堂あり此の正南なり

鐘樓 二間ハ三間鐘を古きもの回祿ハ及び今の鐘ハ文化年中鑄造
三層塔 赤塗三間四角ハ智如來と安ん右の方にあり

古釜 二口獲摩堂の扱あり恒三尺六寸銘あり一ハ貞和二丙成年
二月聖紀阿弥陀佛奉施入中禪寺一ハ應永卅三年の銘を傳授がじ
底朽て不損ぞり此釜ハ少一ハ大形なり



萬敬園

中禪寺境地並湖水圖



三社権現本社

羽青徳赤塗南向二間又之間大床造箱林滅令の

物高欄彫物彩色正南之扉墨塗鞆口之掲ぐ獨籠田色と打也一是
も赤塗正南と东北方又門あり世内庭小玉石を敷て勝道上人弘
仁七年教曼道珍等と付ひ世中一多ひ多時又男辨山の頂上小
て三社の新向と拜し玉ひ下山乃時禁小社殿を造立し多と何
を南社北とあり是れ之社社座乃系創といふ

元禄四年四月廿七日南山 座は宮公辨法親王始て世の中一多ひ多時又男辨山
津法親王と云ふを御し玉ひく津法親王と云ふ

中禪千載祠一拜覺靈奇積雪三冬色開花四月枝
湖光連碧落日影泛澄漪留意人寰外促歸聊賦詩

拜殿

羽青熱赤塗四方椽六間に六間地蔵等を安ん

本地觀音堂

持殿より西の方洞毫赤塗本尊千手大士之本の像一
丈六尺素本勝道上人の化堂内の左右を曰天王の像と安ん故東

十八番の札雨たり

親善の縁結ありとて扁額を懸しと尚津日福ぐ 坂東勝乳記と云ふの不出る由

中禪古堂よりくそむみぐうみの外れまきよりしははあつ波

補陀洛中のありとむむ湖乃きしに立本乃ちのむ久しと

妙見堂

向持附大床造

根本堂

本尊虚空を安ん

末社

戒壇堂

本尊受戒の

摩伽羅天堂

山王社

傳つゆ山と補陀洛山と名付られし子ハ往昔同祖上人尚山

草創多事の同屢親善の靈驗を被つゆひ殊は延暦三年堂山

の西湖の南岸小於く大士の親善を感見まりしとてつりつ

号容を多刻しと安重し多ひの上人傳思惟し多ふに二荒各處

の山中おして親善護塔の様々乃奇揚と示し多ふと是たむ右伝

力のみに何とせ尚山を必大士有縁の灵境あるべしとせ

如心大士の事あり小南海の補陀洛山と此所小標顯して即此山と補陀洛山と名付給る事あり

唐銅鳥居 男神山坐り口より西に男神山大権現と行きて南に

唐皇宮の御書蹟あり額を掲ぐり

石燈籠 二基鳥居の内あり

本戸門 七月七日禪頂寺の老松より坐る者小標開き津古口と稱ふ

船禪頂 是を六月朔日開闢して同月十一日より十九日之宣釈禪中

の者連日僧出巡拜するなり是を船禪頂といふ又七月中之松ふ

りの向建は船と出に名付る是を補陀洛山と唱ふる由男神山禪

頂寺なるもの別は勅行して山禪頂と南方蓋て禪頂寺のりのも

乃一振形とせ

古碑銘 性靈集に載たる弘法大師の記文乃銘なり唐銅鳥居のもの

此よりあり勝道上人神護景雲元年より改述を企むは漸く延暦の
初より登臨を極めたる銘文弘法大師書記より古碑に所
有しが被流して文字見ゆる所なきは仍て高山座主宮

准之后公辦法親王御再興

准后の御撰文もあり是を不朽の傳へむらん事を尊意ありて刑して

箱と造る石碑の上は被流してむる由系系文を見え禪と其初に箱

小細字に彫附せり此碑を唐銅鳥居の前は達王銘文次に出せり

高山座主宮

公辦法親王古碑銘御再興の御撰文

重建勝道上人補陀洛山碑記

人籍靈境以進道境因勝人而彰名如補陀山亦徵
哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大師揮天縱

才文之詳矣於是世人昭々知其為名山也其文則載性靈集傳到于今而其碑則歷年遼邈掃也不存嗚呼廢而不興非人情也近者余鼎樹貞珉刊其文焉庶乎使臨者讀雄文以審靈境知靈境誠為進道之緣矣然則此舉豈曰無所係乎世有高談淨心幾視山水者不亦謬哉因題碑陰聊紀歲月云

寶永二年歲次乙酉春三月

前天台座主一品公辯親王識

沙門勝道歷山水瑩玄珠碑並序

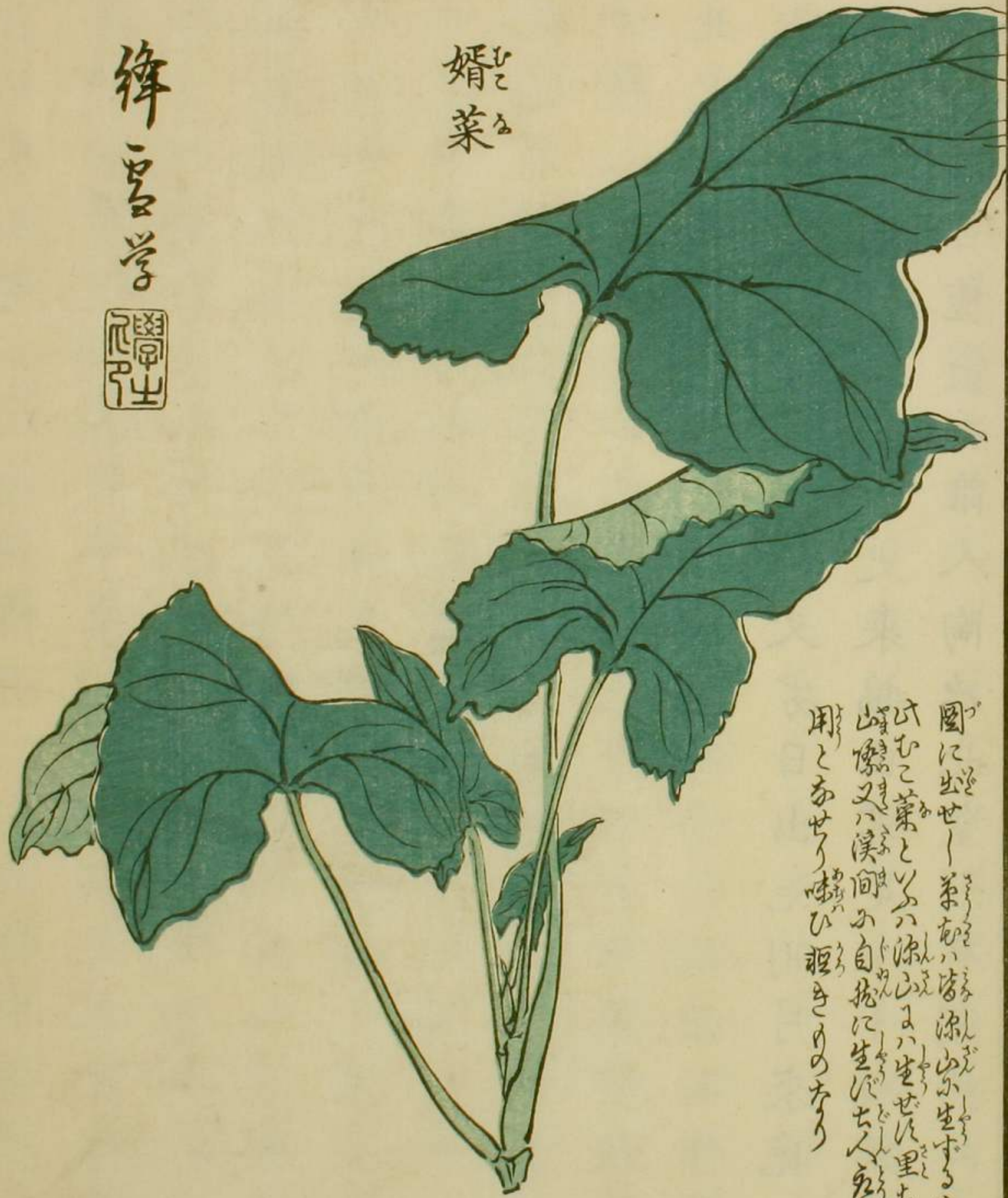
蘓巔驚嶽異人所都達水龍坎靈物斯在所以異人卜宅所以靈物化產豈徒然乎請試論之夫境隨心變心垢則境濁心逐境移境閑則心朗心境冥會道

德玄存至如能寂常居以利見妙祥鎮住以接引提山垂迹孤岸津梁並皆靡不依仁山託智水臺境瑩磨俯應機水者也有沙門勝道者下野芳賀人也俗姓若田氏神邈救蟻之齡清惜囊之齒桎枷四民之生事調飢三諦之滅業厭聚落之轟々仰林泉之皓然粵有同州補陀洛山葱嶺插銀漢白峰衝碧落礮雷腹而鼉吼翔鳳足而羊角魑魅罕通人蹊也絕借問振古未有攀躋者法師顧義成而興歎仰勇猛以策意遂以去神護景雲元年四月上旬跋上雪深巖峻雲霧雷迷不能上也還住半腹三七日而却還又天應元年四月上旬更事攀陟亦上不得也二年三月中奉為諸神祇寫經圖佛裂裳裹足弃命殉道繼

緯
豆
学



婿
菜



圖に出せし菜は海濱に生ずるなり
此は菜とよみしは生ずるなり
山嶽の溪谷に自生し古くは食
用とせし味は甜きなり



姫
石楠木



岩
千鳥
花は赤く
表は出る

負經像至于山麓讀經禮佛一七日夜豎發願曰若使神明有知願察我心我所圖寫經及像等當至山頂爲神供養以崇神威饒群生福仰願善神加威毒龍卷霧山魅前導助果我願我若不到山頂亦不到菩提如是發願訖跨白雪皚皚攀綠葉之璀璨脚踏一半身疲力竭憊息信宿終見其頂恍惚々々似夢似寤不因乘查忽入雲漢不啻妙藥得見神窟一喜一悲心魂難持山之爲狀也東西龍卧彌望無極南北虎踞棲息有興指妙高以爲儔引輪鐵而作帶笑衡岱之猶卑晒崐香之又劣日出先明月來晚入不假天眼萬里目前何更乘鵠白雲足下千般錦華無機常織百種靈物誰人陶冶北望則有湖約許一百

頃東西狹南北長西顧亦有一小湖合有二十餘頃眇坤更有一大湖羃許一千餘町東西不濶南北長遠四面高岑倒影水中百種異莊木石自在銀雪敷地金華發枝池鏡無私萬色誰逃山水相映乍看絕腸瞻佇未飽風雪趁人我結蝸庵于其坤角住之禮懺勤經三七日已遂其願便歸故居去延曆三年三月下旬更上經五箇日至彼南湖邊四月上旬造得一小船長二丈廣三尺卽與二三子棹湖游覽遍眺四壁神麗夥多東看西看汎濫自逸日暮興餘強託南洲其洲則去陸三十丈餘諸洲之中美華富焉復更游西湖去東湖十五里許又覽北湖去南湖三十許里並雖盡美摠不如南其南湖則碧水澄鏡深不

丙申の春
椿山人畫

平河

岩澤瀉
石間の苔の中に生ず



桜
初夏に花を咲かす
梅の如く小細あるゆゑハ
岩淵に生ずるものナリ
花は白く葉は緑なり

可測千年松柏臨水而傾綠蓋百圍檜杉竦巖而構
紺樓五彩之花一株而雜色六時之鳥同響而異觜
白鶴舞汀紺鳧戲水振翼如鈴吐音玉響松風懸琴
抵浪調鼓五音爭奏天韻八德澹々自貯霧帳雲幕
時々難陀之冪歷星燈雷炬數々普香之把束見池
中圓月知普賢之鏡智仰空裡惠日覺遍智之在我
託此勝地聊建伽藍名神宮寺住此修道荏苒四祀
七年四月更移住北涯四望無尋沙場可愛異華之
色難名驚目奇香之臭叵尋悅意靈仙不知何去神
人髣髴如存念歲精之無記惜王侯之不遊思餓虎
而不遇訪子喬而適去觀華藏於心海念實相於眉
山蘊蘿遮寒蔭葉避暑喫菜喫水樂在其中乍乍乍

干出塵外九臯鶴聲易達于天去延曆中 柏原天
皇聞之便任上野國講師利他有時虛心逐物又建
立華嚴精舍於都賀郡城山就此往彼利物弘道去
大同二年國有陽九州司令法師祈雨則上補陀洛
山祈禱應時甘雨露霈百穀豐登所有佛業不能縷
說咨日車難駐人間易變從心忽至四蛇虛羸攝誘
是務能事畢矣前下野伊博士公與法師善秩滿入
京于時法師歎勝境之無記要屬文於余筆伊公與
余故固辭不免課虛抽毫乃爲銘曰
雞黃裂地粹氣昇天蟾烏運轉萬類躡闐山海錯峙
幽明殊阡俗波生滅真水道先一塵構嶽一滴深湖
埃涓委聚畫飭神都嶺岑不梯鸞鷲無圖皚々雪嶺

雪割草
 揺るぎのふて小るる
 日のたろ



必芳散香



苦桃
 花ハ初夏ハ咲桃の如ク乃如ク薄紅
 老葉茶ナリ実ハ結ぶ未ホの實
 ナリ小ハ八月ハ熟ハ比安熟セ
 丹頂好ハ由名延齡の葉ナリト
 稀ハ富士山ト云の葉ナリト
 ね似

丙申十月上浣
 琴音寫生園



此實赤色
 ナリ

岩鏡
 初夏に花咲
 湯の如く紅
 色あり岩に
 生ず



恒古椿影
 椿草

岩蓬
 我ハ
 岩蓬とも稱ス



何音寫
 何

曷矚誰廬沙門勝道竹操松柯仰之正覺誦之達磨
歸依觀音禮拜釋迦殉道斗藪直入嵯峨龍跳絕巘
鳳舉經過神明威護歷覽山河山色崢嶸水色泓澄
綺華灼々異鳥嚶々地籟天籟如筑如箏異人乍浴
音樂時鳴一覽消憂百煩自休人間莫比天上寧儔
孫興擲筆郭詞豈周咄哉同志何不優遊弘仁之年
敦牂之月月次壯朔三十之癸酉也人之相知不必
在對面久話意通則傾蓋之遇也余與道公生年不
相見幸因伊博士公聞其情素之雅致兼蒙請洛山
之記余不才當仁不敢辭讓輒抽拙詞並書絹素上
詞翰俱弱深恐玄之猶白寄以瓦礫表其情至百年
之下莫忘相憶耳

西岳沙門遍照金剛題

右性靈集所載也

中禪寺私記

日光山滿願寺者稱德天皇御宇神護景雲年中當
國芳賀郡人沙門勝道勤求佛道攀躋靈窟為鎮護
國家為利益衆生勸請於神祇造寫佛經始卜斯山
新起道場其山中央有嶽其高不知幾千仞其嶽半
腹有大伽藍号中禪寺安置丈六千手觀音像其傍
建立靈祠奉崇權現又妙法蓮華經一千部并大般
若經六百軸併納之箱底安之堂中每歲四月二十
二三日兩朝之間有修大會前日講般若經次日講
法華經奉辨備三十三杯御膳奉供觀自在尊辨備

百八十杯御膳奉供權現王子件會住僧等守次第
勤行之已爲規模敢不失墜爾後碩學相續勤來講
匠嚴重之儀不遑具記自茲寺至于山頂二百四十
町者結界地也五種相分四神具足其前頭有大湖
揚五色浪如八功德池湖之南涯有別所彌歌濱彌
勒大士妙吉祥天靈驗之場也湖坤有一梵宮號日
輪寺安置不動降三世軍荼利大威德金剛夜叉等
尊像蓋是本願勝道上人修練之砌也其前有小嶋
彼上人止住此島禮拜之次奉祈聖朝柏原天皇遙
聞此事深成叡感令補上野講師仍号上野嶋湖西
岸有十六丈千手觀音石像曰千手崎弘法大師手
書山門題額補陀洛山發心檀門其門六宇蓋是宛

六度也化導無限遍被遐迹之鄉功德不孤必有隣
旁及幽顯境上自天子以至於庶民壹是孰不欽仰
誰不歸依哉其地之爲体神嶽蔭々送千嶺高峙靈
湖渺々寫四暝而遙廻凡厥峻極之狀勝絕之美具
于弘法大師御作勝道歷山水碑文序今之實錄粗
舉大槩而已于時保延七年夷則初三日吏部侍郎
藤原敦光爲貽方來揚確記云

武射祭 毎年正月四日武射祭の神子として所宮乃社家一人爰の
社勢と並掌はるるの堂山一古実乃武射乃素儀とて湖水の色小
て武武成初小日光町方又と近村の老と老堂山一福と教ちるる
時系福乃素儀一同と素と教と堂上古より一の素儀ありと云ふ
慈悲心鳥 此鳥山より別日名有るあとの山は其無味と云ふ

沙羅樹
慈悲心鳥



慈悲心鳥

神山靈鳥自呼名薄夜層
巒陰籟生鸚鵡久休宮裡
語頻迦已脫殼中聲珠林
開處銜花去瑤闕過時向
月鳴樹色深々看不見天
風吹度梵王城

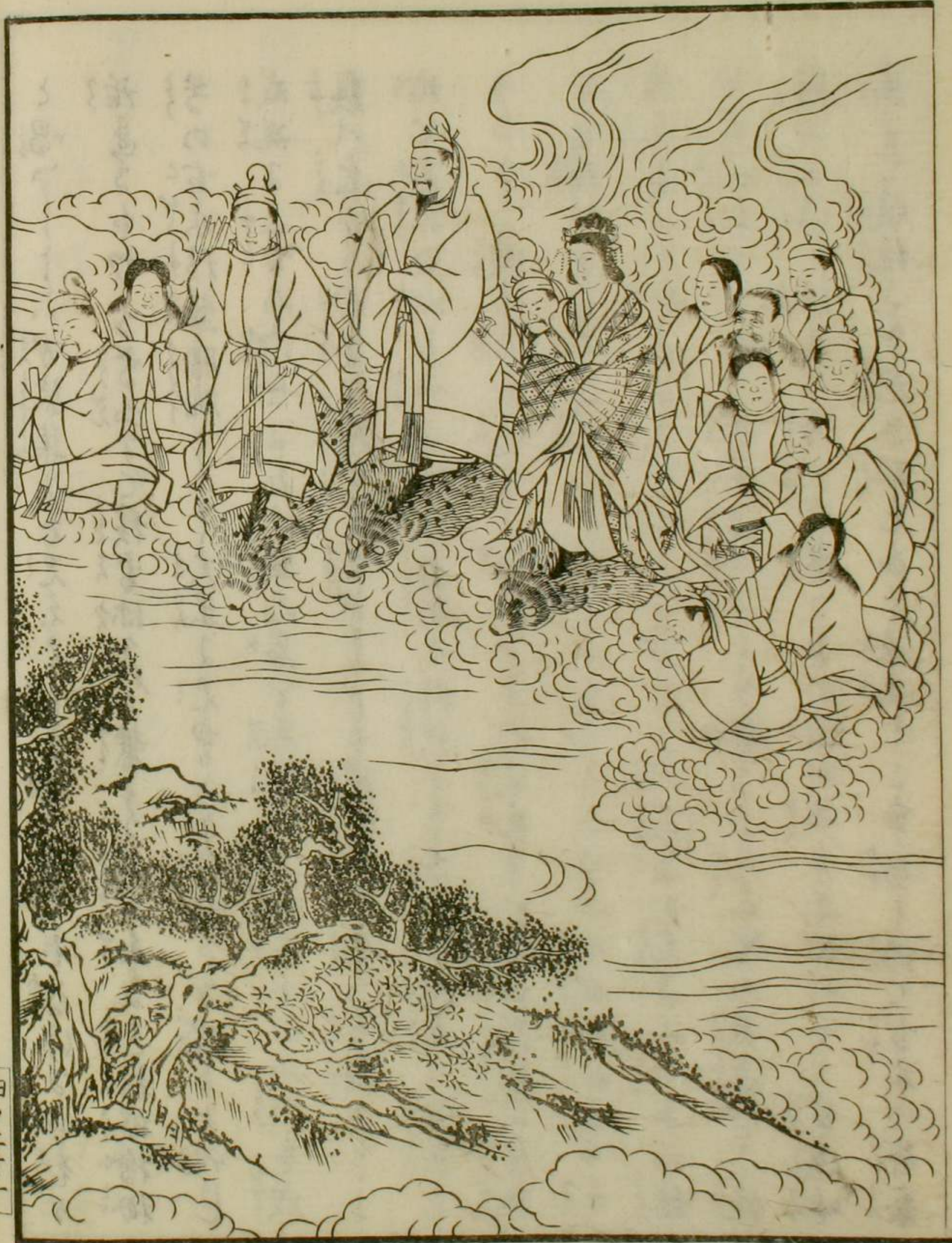
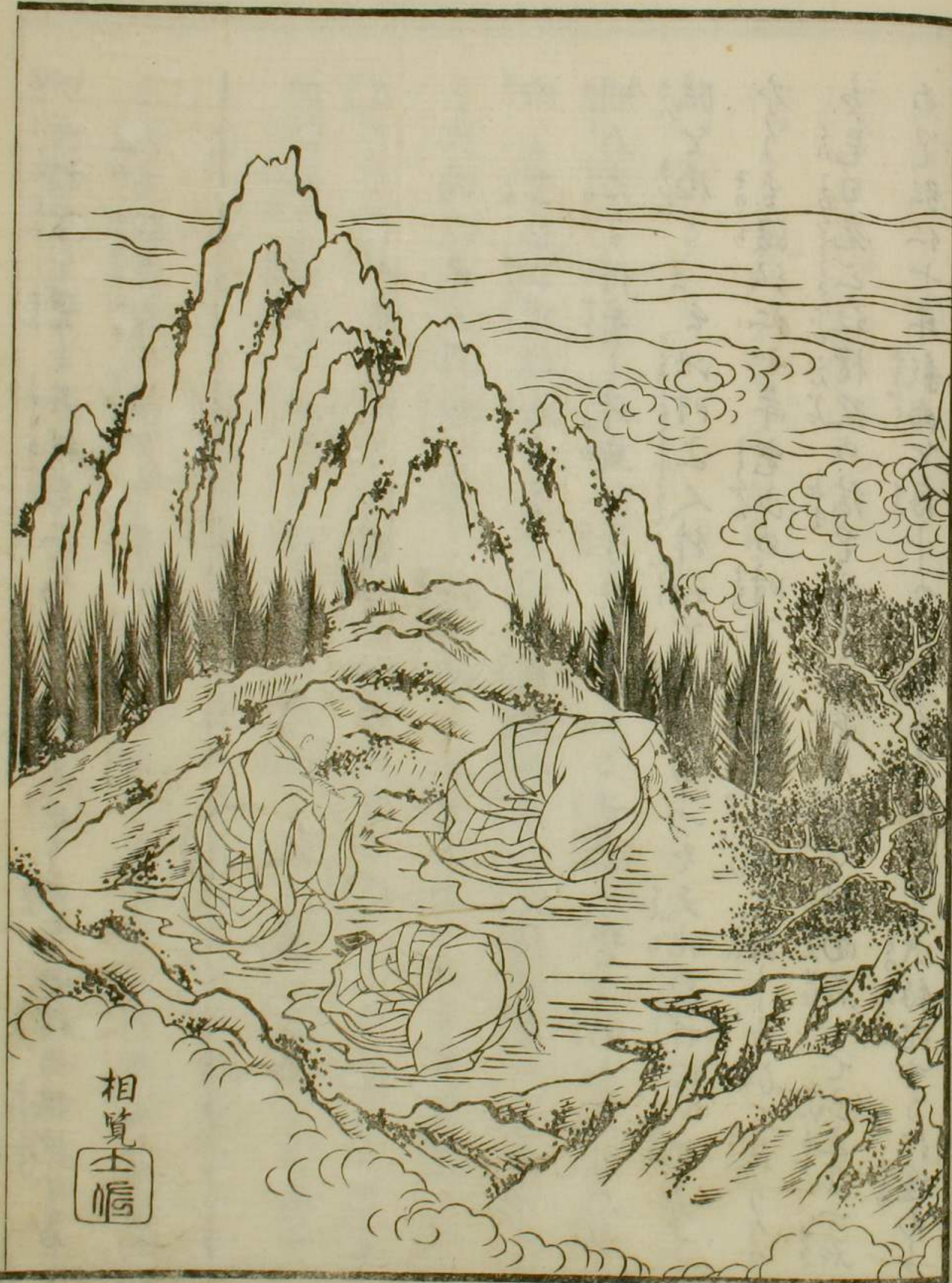
紫溟驥

石坂教寫



以く君は稱するもく 弘法僧と名附るが如き後初夏の頃より
夢を致せり 山の中にうぎうぎ荒波寂光又も薬山遊も高く栖
る由時として 山内にも廻翔し来り鳴きあり人家まで西へ来る
と稀あり 夏の最後二本宛り日か途より 羽色皆鳥の如くうごめ
鴨の音あり 紀の道先に榛名山といひて 社家乃家にかへりしは
るくが活するは 山は三室有戒行をあげりし三室有ハ
稀あり 戒行を教文をなけりしつひうごまはやくわ
鳴すも戒行をとりしを 慈恵人有ありと舎乃ありしが活する
薬羅樹 戒を薬羅双樹と名唱へ 常は夏棲ととり曰く 月比むく
ゆきやうされを毛棲とあり大は異なり 山中は多く生せり
男體山 二荒山補陀洛山黒髪山黒上山日光山男體山など
り二荒と精ぞ 況を常巻るを 毎くこれを生じ 畧せしは黒髪山

と唱へしは 万葉集も毛を古き唱へしを けり古きが
活するを けり言山と積雪はこれと 榛より 嶺へ 或るは松楡檜柏
等の古木 積翠騰騰とくままは 是より 名附る 謂とを 活し
或況は上古乃 齊世はこれ 國乃 名と 毛國と 名附毛と 以し 時を 成
熟れ 名を 田島は 釋して 生じり の 成作毛と 唱へ 成熟せざる
地と 不毛の地と 味あり 如く 國も 神代より 言山は 樹木は 茂る
るより 國の名も 毛より 記れるや 又毛とハ 草木稻蔬の 生熟
する 謂と 毛と 黒髪山と 名稱する ありんといふ 此況の 如きも 毛
理尚 生るに 似たり 又男體山の 名より 大ま子小ま子の 二子の 稱
を 毛生出せし あり 叔蘇麻頂は 山より 登ると 凡之里の 道道なり 絶
巖小之社と 記する 頂上乃 廣さ 南水拾町 許東福之町 布と 登道 喰
岩とて 道絶する 危き 所を かく 崎嶇する 事易し 仍て 古木の 蒼翠



四時枝葉と葉石楠を二尺より二四尺取り或は斷燭の拱抱す處
 き大木教多かたき林となせり絶頂より或は白雲の神秀ありことハ
 云葉に速くくく類に神社と祀る或は猪乃上人神護宗元等
 四月初七辰時と企てす路よりて雷鳴し路は迷て坐るとして
 史より十六年と經て天應元年四月又企て坐るとして迷て坐るとして
 六月同二年三月經て寫し仙と圓し山麓の坐して一七日續經し神
 明乃為し信者し神威と崇め奉るんと祈念し誓ひ漸く夜目小登
 臨し極と云ふ此時上人神祠と祀り或は天地の神明と祀り或は
 たりと後弘仁七年坐山の時と神の神向と稱し或はひて祀りたる
 也是日光之社権現の鏡里より傳へ乃始之對面石とて山上より一石
 あり弘仁七年神向と稱し一石ありといふ此後祀するに違わく

神頂して神秀ありと知る

万葉
 土 云む玉乃黒髪山の山麓に古くは傳へしすあくと思ふ人丸
 今 云む玉乃黒髪山の山麓に古くは傳へしすあくと思ふ人丸
 新編
 拾遺 牙のうへはからんををうぬ黒髪山はあまたあるを
 百首 藤人の黒髪は髪や折れん黒うみ山乃六月雨のうらぬ 公實神后
 同 云む玉乃黒髪山は古くは傳へしすあくと思ふ人丸
 うむ玉乃黒髪山乃頂より古くは傳へしすあくと思ふ人丸
 夫木れがわく髪あんとを君もよと黒のうみ山乃花咲くを
 寛弘十三年十一回 神皇 初倉より公は門跡坐山は時河野宰相友宗公業御加
 座の初より坐山の初より
 山麓の樹よりこれバ古くは傳へしすあくと思ふ人丸
 崇安元年三十回 神皇 初倉より公は門跡坐山は時河野宰相友宗公業御加
 座の初より坐山の初より
 時よりぬきぐひの苑も友かあて黒髪山は少する白雲

如宝山



湛南寫



四十三

男躰の晴雪



男體山

大マナゴ



南湖 中禪寺に湖ありと唱ふる所のあり才一の大湖とて九東西三里
 好南水九一里好又八四湖池と名附るとを縁起と云えたり九山腰
 山趾に曰括八湖有とあるするに遊とを在るも宜くか刻れる所の
 あく大所乃記文に載するが如く阿坤更有一大湖幕計一千餘町
 云清涼なる冷みあり名麟泉も生せび一熱の塵芥もたぐ為小白波
 汀淡く活々早年又を霖雨にも不耗不溢それのそは津護宗雲元年
 勝道上人遊説されしより今も於現熱とて奇觀ある大湖といは
 南岸橋 華嚴滝落口より上か有り湖水の流瀧足に水路に板橋
 を架けを供仍人秋淡より是と流をて別所へ来る魚路といふこと
 足尾より峠へ掛り巖上小中禪寺及一別る岐路有り支より山路乃
 陰を經て中禪寺へ詣る所の性來せり
 歌演 湖水の南岸あり上世勝道号所差の汀演と遊説し陸切せり

れ 時天人下りて秋依嶺嘆きしやの依り支より此所成秋淡
 と稱する由を旧跡今花供仍者の菴の所を宿と稱する有り是を
 旧跡ありといひ
 奇蹟 南原より秋淡より西乃方は地を勝及所の開建なりと云
 大所の茶剣とて是嘉祥元年四月此地に到りて多ひ茶師堂を創建
 し多ひ多利乃本寺を安んずる中か小茶壺を埋りて薬師寺と
 称号此茶壺といふ天竺乃耆婆醫王より一行和尓に傳り茶壺
 あり由は奉ハ南此古記なる宸翰の六軸の文に述ぶることを以て
 南原より八町程築き出し如き小山の出傍に茶師堂ありと云
 勝業師寺と稱する所あり
 日輪寺舊迹 勝道上人秋淡と云が茶壺を結する時或秋の暮に
 大日輪の内に入大尊の出現を獲しつひに由是に大尊を刻りて



石楠花

不に筆剣をこれ日福寺と名附むは中流も南岸あり

上野島 此地を中流寺別而乃造の湖岸より中流に浮き出

くる如く見ゆる島あり奇石珍木ありといふ傍乃上人の遺骨を納

碑ありりまじろふ慈眼大師乃遺骨を納し増ゆり仍ては造船禪

頂の形取あり

千手勝 此地を中流寺より西岸の湖岸より傳へり勝道上人延曆

三年四月廿日湖上よりて金色の千光眼此新向と稱しあり由志

爰に千手大士を創建しむし補陀洛山千手院と名附むといふ後

弘法大師此此時此地小来里千光眼を礼持して補陀洛山祭人

檀門といふ額を書き置き堂宇は掲ぐるといは法の流より燈火は雁足

焦土と称しと文政二年の表一山乃法門院上人穢るじ時は祭額

小依て補陀洛山祭人檀門乃額字也

河門至公猷大五河筆と深きせむふとふ

千手原 是を千手勝より續き赤浪系此南面ふよれり唐九一里

半餘もあける由茲を性及ゆる変小あり稱を初建するその中流

千手かんと稱する筆の名産を生け

千手砂利 是を千手勝の土勝にあり其白くて舍利石の如し或を

千手石とも唱ふ 千手清水 千手堂の後山より流出る清水あり

葛蒲沼 南面乃水奈の入口をいふ爰の水渚小敷生禁新乃碑あり

是より西西南を境とせ

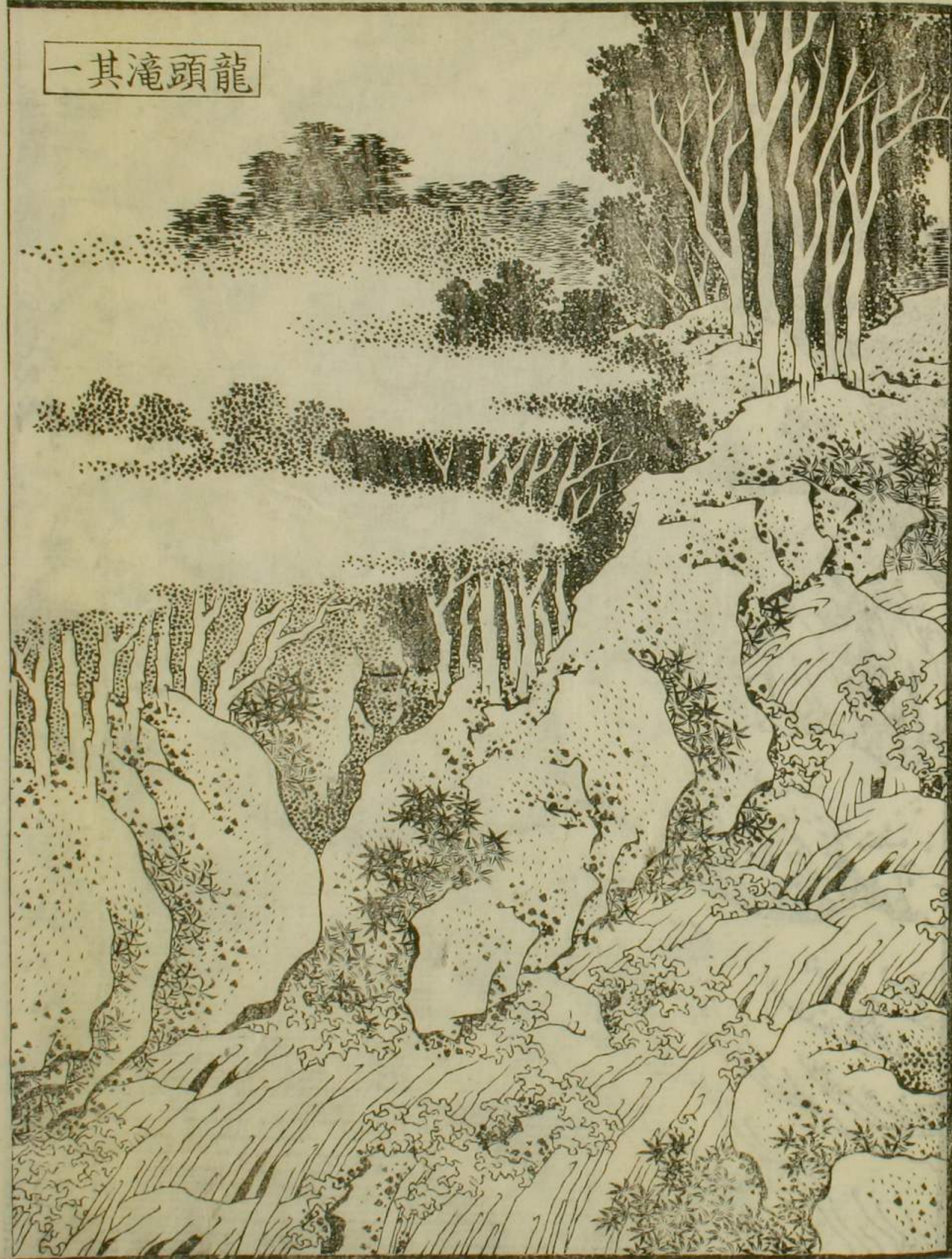
赤岩 南面乃水渚あり 白岩 南面西岸乃湖岸あり

瑠璃壺 葛蒲沼乃造より水乃山中に洞窟あり縁起に勝道上人

の遺骨を此窟中に納むとあり

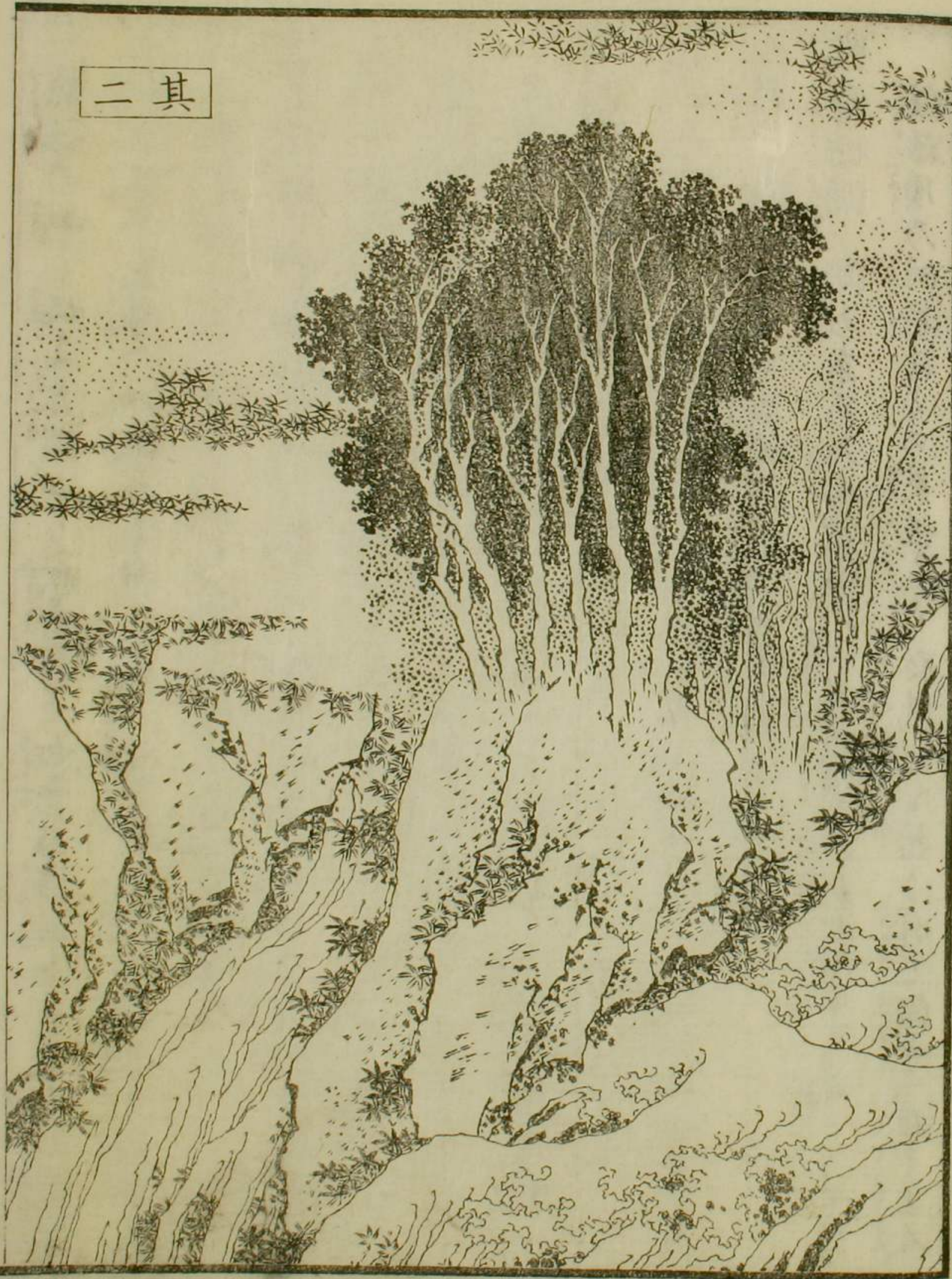
龍頭滝 是を湯院の下流なり路傍より望むる時を水勢おのつり

龍頭滝其一



齡七十二
畫狂老
人代筆

其二



應需馬
狂老人
代寫意

龍乃如一故日名附く秋來れを紅葉乃好雨多る中名別名と
紅葉瀑と名唱ふ此瀑を南湖と名入を小敷ヶ所と名有て絶景を
事筆紙に尽しけり其大概を略圖して前より出せり

地獄茶屋 中禪寺別所乃池より湖あり陸に凡一里餘ありて往來
橋と踰て其上に何名附るやハ此茶屋より東に當り男衾山乃
麓に洞窟ありて窟底乃湯と名知ざるや名古人地獄窟と名其
里近きや名竟ふ地獄乃茶屋と名其湯元を龍を名れを旅人
中休の乃後く

本又寺旧跡 是も湯元往來橋乃東の山後あり弘法大師開基とい
傳ふ是も今を故地乃み其名を傳ふ

顯釋坊洞 湖あり東乃入江流り往古此僧が入水の所なり年々七月
演禪頂乃時毎法との灵供と名彌陀經を指り付て湖中へ投じ人

回向寺は忽弥陀經を窟底へ引出の如くして沈む禪頂は道
俗奇異の想をなせり

辨山 丸き山あり湖あり水より男衾の南に連る

辨石 湖中より石やまれ池にあり名附く

四條寺旧跡 辨山より南をて湖水の邊弘法大師建立此旧跡と名

戒壇所と号す

法華密巖寺旧跡 辨山の上なり其洞阿闍梨建立

轉法輪寺旧跡 辨山の麓敷是建立

般若寺旧跡 西湖の岸より弘法大師の建立なり

梵字磐 般若寺の麓あり此内に何り弘法大師梵字と名しり

若松崎 老松あり日臨寺旧跡の邊と般若寺跡の邊あり

標芽原 或は戰場又は赤沼系あり唱ふ是も標芽原の異稱にて



赤沼ヶ原



竹谷高村

別にそなたもあつたぞ赤沼と唱ふる本説を此野の中に清く濁し出
乃其沼有り田祖上人願伽の水と汲りひく謂を以て後世あれと
願伽沼系といふ事赤沼と名を非我なり時血あづれり赤うじ
といふ説よりいぬり亦我場系此名も古述より記す此系野
を中禰古別所の邊と云ふ湯元入りに三里乃其野より又云標芽
系と或を忠女治系と云ふ

今 標芽の先志めちる系はさく艾我世中ふ何んかぎらうと
我 いろね述の標芽系のを系はさくも分てを枯果すや其
六指下野や標芽かほれさく艾のののひふ身やや標芽
標六 標芽は志をちる系はさく艾のののひふ身やや標芽
またたの先志めちる系はさく艾のののひふ身やや標芽
日 下野や志をちる系はさく艾のののひふ身やや標芽

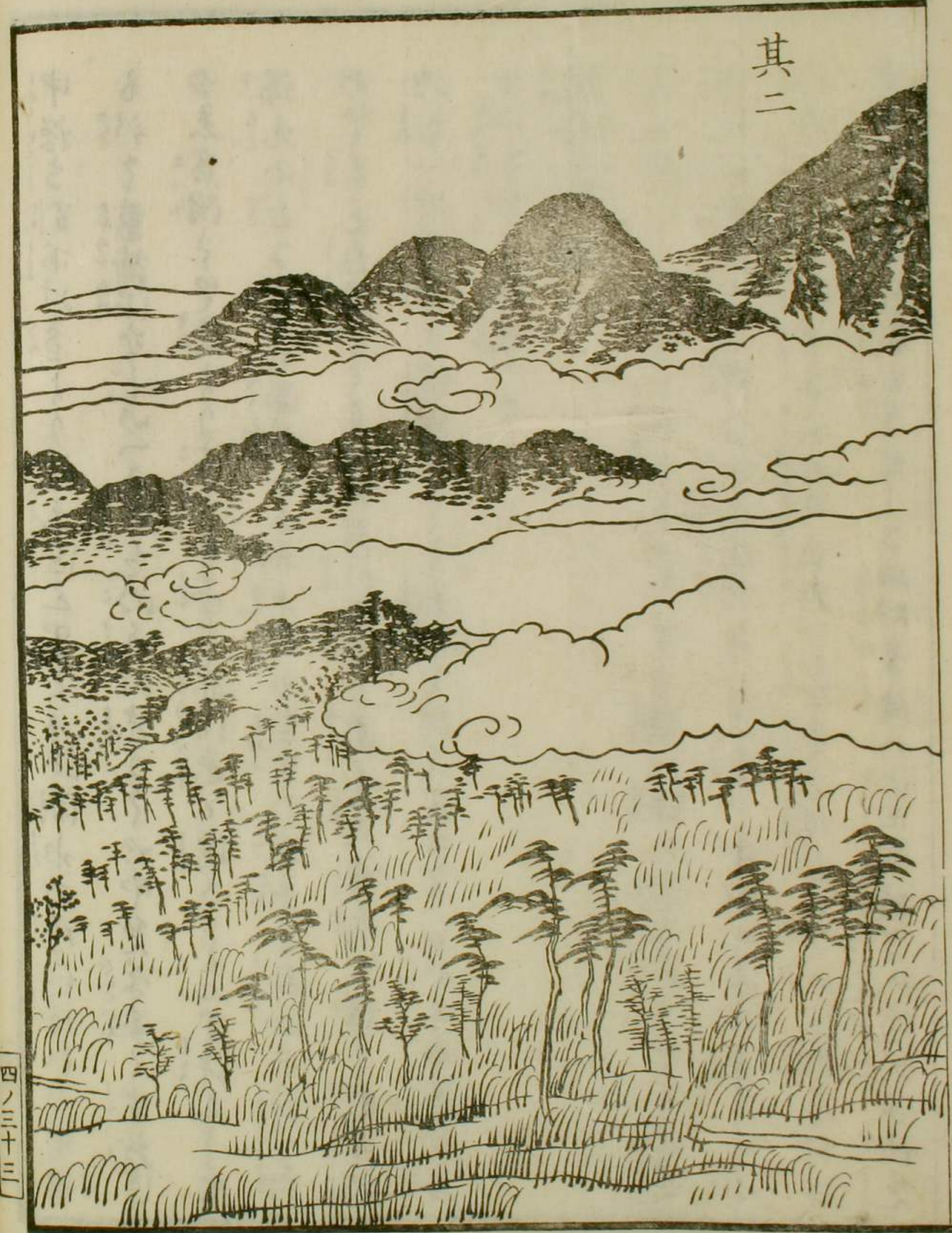
中禰古別所は遠より湯元を三里といふ湖水の傍に陸ひ一里許
も乃其菅蒲沼などいづる所を湖は此末より何や免学多く生茂せ
ゆ急名附く何より本志を海り赤沼系と云ふこと二里許より七
湯元小なるすべし湖茫々る平系或を芝生乃地多く敷居乃此花
あや妻毛氣依かく述曰六月以み至り漸妻乃時氣を湯り敷百種
乃其一時は開き爛熳せし花種と云ふ種多しゆゆ一由急小一名
と云花畑と云唱り

戰場原の説

上古神いくはあり所と云ひまこと遠に後の世あまも種余
古所浦越船下野の小山退治せし是れハ永徳元年の奉りて小
山右る改我政を子孫大丸南船へんと云下種余の下知を殺さける
ゆ急右を請督教出るせしは此時常陸の小田原波守入道父子由先



白根山



其二

四三三

手に素り右切を懸し小山の城を攻落さる抑るは嘉慶二年六月
十三日古河の佞人野田右衛門助四郎人をも搦り獲合へ素り以て
その白状中をみるも小田入道重信父子小山家太九と同宗一門太
九と隠し重信由成中は小田父子先年右切を尋ぎる人あり何乃
信有て款は固言致しあるやと疑あがり同き六月十三日小田の
子二人百領七月十九日後上校中勢大捕朝宗と大おこして小
田の城を攻け進む小田直高並子息二人家老佐田某等城を落去
野田男辨山一楯籠るは所を言ふ山もて力責るも難落同き十一月
廿四日よりお戦ひつるといへども勝負も分らば依て獲合及より
謀を以て海老名備中守成は使として免許ては取留出城すべき
由は信をける由志翌康慶元年六月小田并子息孫田并と石白出
嫡子右衛門を那須越後守に頼むは同き廿七日曉天小又獲合勢

政よは依り小田の家臣皆百餘人討死し城は火を焚て焼る者ど
も没落せりとつふ事大系紙に載りては初小山の家を亡り姓
若治承年中より右大將家又仕り小山左衛門尉朝政兄弟三人各
武威を輝し獲合公方家の世に及びて毛園東の七巻形と称する
内あり一か一時小滅し又小田重信が家ハ宇都宮の元祖重良二
帝宗親より出づ是も連綿とて常陸に伝へ七巻形乃内なる名
家をれど以時よぞ亡く不依所は男辨山とあるは今も山中に墓
張楯弓張楯かといふもあるもさる由志ある事なくん程後の考小
傳ふ

白鶴 七人三社権現乃神考なりと号しむりより一番のそは系
小はとけ足難を養ひつ進どいばあつこの翩翩と去て丹頂の番を
のり愛めは先り四六十年最を系承乃中小遊び居るを湯元へ

性及する旅人をも驚かす由近く見らるるものもあつたかど近來ハ
見らるるのあき由され小神窟の伝友迦山といふが活れるをたの進
路より白持をえんとく事毎又妻より秋迄乃内一夜宛中禱寺よ
り湯元へうけてゆきせしに昭和の末安永の始れ多も系世の中
小あつる葦原のゆみ六尺りや為あん上より空路を出し居る
と見えたりとより後年毎日此世を巡遊とも遊きらるを絶てそ
侍ども見えざるを近世人乃かえりく壺子の見えざるを在
と為んとく葦原城分入杖などせし由志神もかそれくをく葦
原乃中へく遊る事あつんと活遊也

野端湖 男神山乃西小あり廣さ九十町小一里許あり湖名の廣校
とつた皆二十六町と一里と定めし方量と知べし下図ト

西湖 千手塔より西小あり由志名とせ或を薊とひく湖とせし

九一里に二格町併紀文日西顧亦有一小湖合有二十餘頃と云
蓼湖 男神山より乾は苗蓼茶多き由志名附廣さ二十町許
符菴湖 男神山乃後の方志希藏の麓にあり一説日上世山中人
と害はる毒籠すみける由志壺神は亦小符菴をひし由志名附といふ
余亦の言山灵地をえけ名あり

魔湖 芝を葉白根と前白根と乃石小あり田邊有像より深き事ハ
数有るくは湖乃獨へ長遊く近附くりのありとより又由志は魔湖と名
附るは廣き湖とありぬ中

佛湖 芝を葉の魔湖と相對しより廣さ三田町田方志有へし仏
砂利を出は湖乃形を山越の跡隨乃尋察ありとて名附る由於
焉白根山乃條に出たり

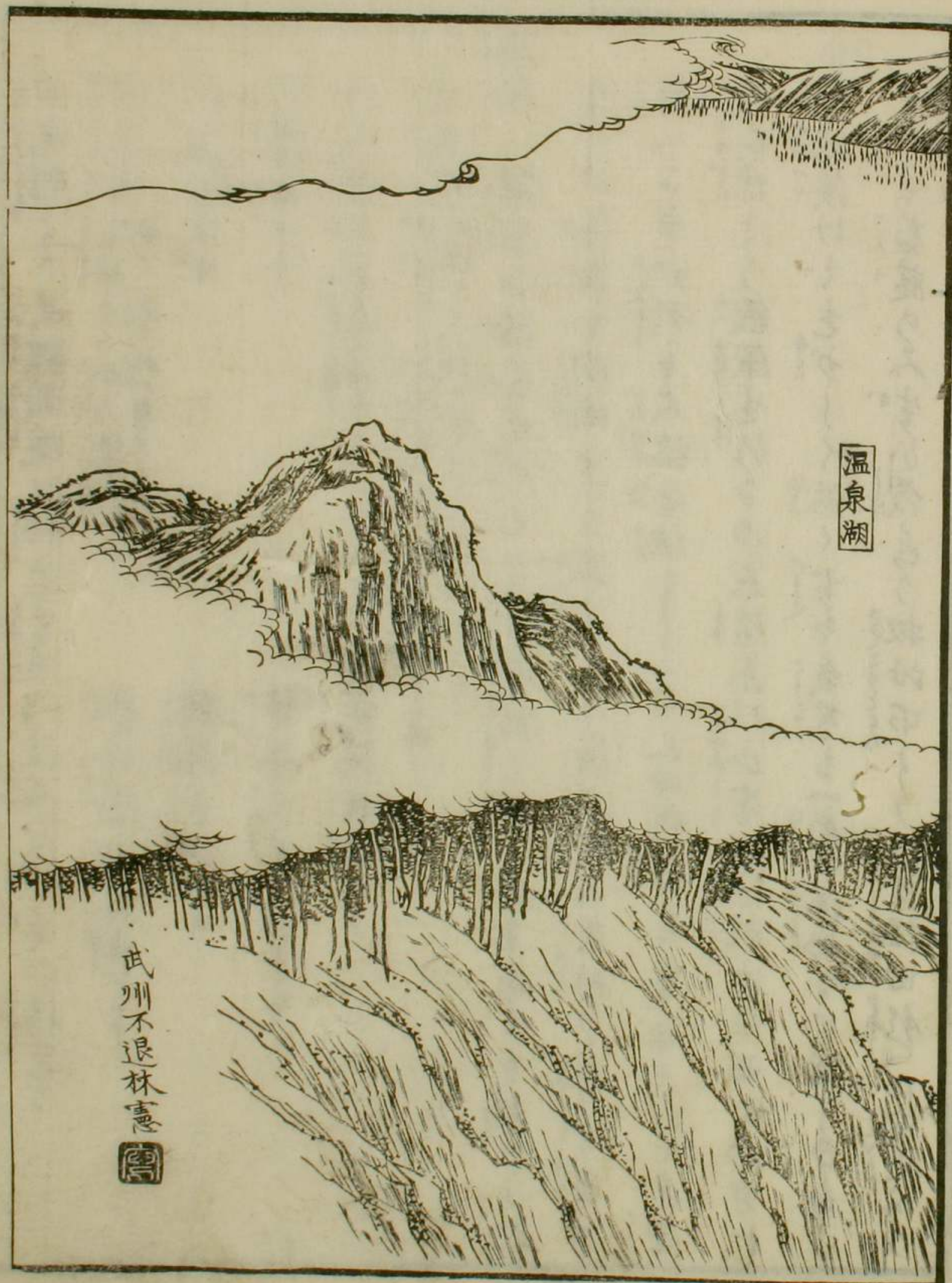
須治 茲を神祇乃内志遊くは法谷教桑山郷乃山奥由志行て湖

あせ見ゆるりの稀なり河山内より粟山は六里の山跡にて又
粟山は内湯西之河俣をとり所より河跡は山跡六里といふ
合く括二里の山跡は人境乃絶ゆる所也括後する所の形一
唯古より傳る所を括する乃みされども男神山古跡又を奥白根
山等此絶頂より遥か見ゆ方位を男神山乃水裏小苗は廣さ九
一里四方程大脚の記文云北望則有湖約許一百頃東西狭南北長云
又云覽北湖去南湖三十許里云云其湖乃清潔に一々異景珍本湖
岸に連る松栲枝と岳岳底も深し砂石皆み彩乃色もて清水
おのづからみ色に見ゆを秘の華に記する景色もて穢と穢とる
が如く四季乃む常に絶て偏小仙人境と名し不登く樹木皆岩上
小屋端して曲折自然の景色なりと仍く秘沼と稱せしが今ハ縮
沼と号し水末三方へ流進落舎津一を至りま一一流を上野の山

中へ流入り利根川の水源ありともいふ一より水跡とされも見
定れたるものも形一尚國を流進る者陸下絶へ流れ入る利根川と
稱するを彼人の叙述にあり亦此沼湖上世を一湖とて其し
由るれも是の法の以よりもや分裂して十二湖とあり中流ハ次
牙々に會流して利根川とあはれり

湯湖 是ハ湯元小あり廣さ九括四六町小二十町許

中禪寺温泉 八湯 中禪寺別所より西水に南里赤沼系と逕湯
元を三里日光林橋より六里あり其も凡雲寒威をげ一三月末
迄も終寒は由是四月八日と初と一々登山一各湯室を聞き初む
是と毛白根嶽をすこ流多く六月末より六月小初とされを塔
寺もそのも少く九月に其前山は雪障り是九月八日と終りて
湯室を中て麓へ下り日光町方のその持と中湯室と聞き目く

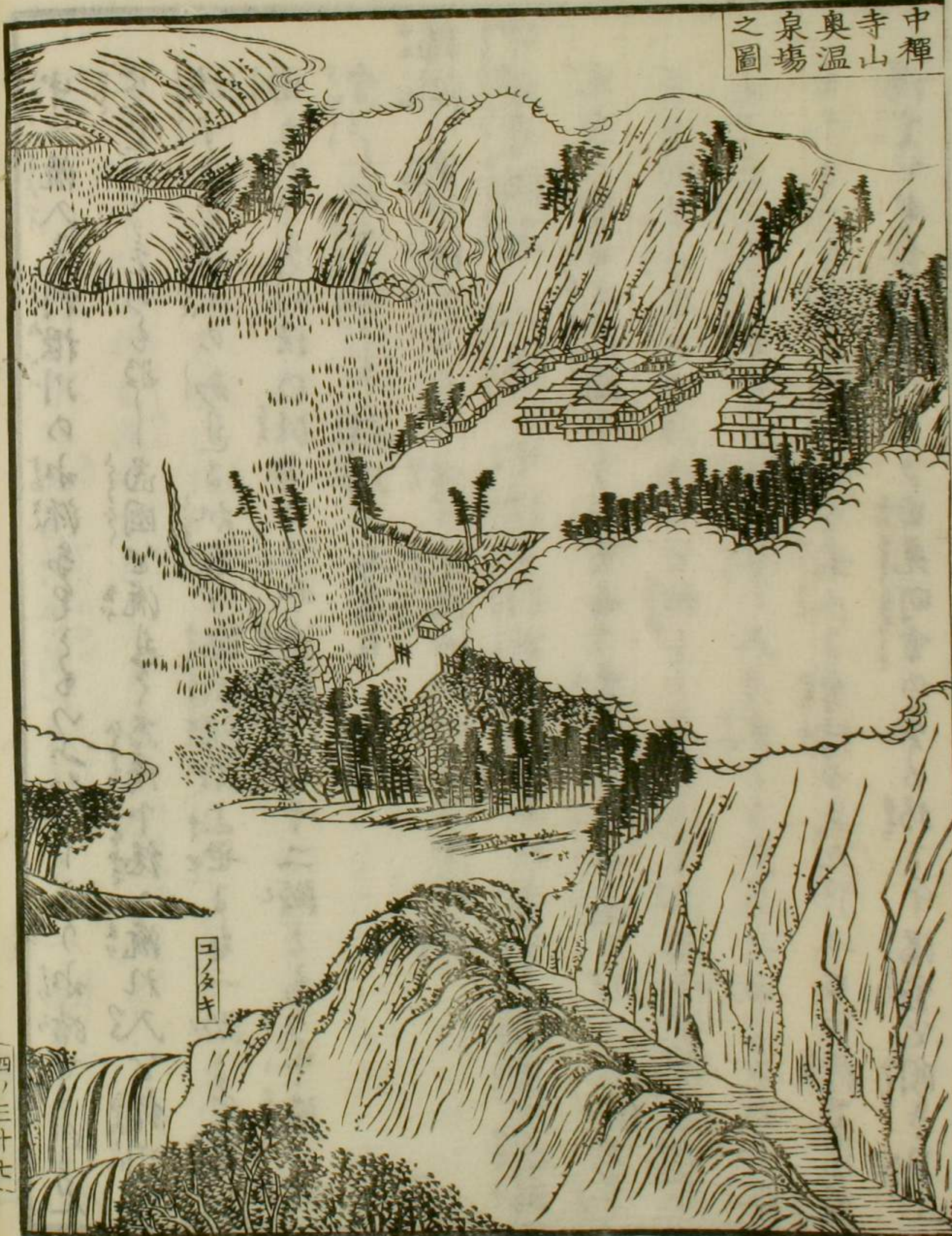


温泉湖

武州不退林意



中禪寺奥山
之泉場温圖



ユノタキ

日光町より米穀園蔬を初先至修乃法品を齋負ひ送さる

河系湯 熱く乾く時ハある

燒湯 苦味

中湯 熱なり

石取湯 牙一金癩小妙なり

自在湯 本湯なり法ある時其ハ水不自由なる時

湯平 温泉の浴室九折あり毎年始と終とゆるあとも煎り紀

きりけ温泉を岡原を一年代去り九折の巻帳を各層廣小

揃へる地形を大抵平坦なり三田町程を有る處と東寄

の山傍より温泉生ずる少急皆東北山麓に連なり西水乃方に

平坦續けを毛少く低く古を交り一面の湯湖を有る事あり

ん今も蘆葦のみ生ひ茂るなり根地所より上段田原の間にあり

其山路のこつハ次小なるなり

金精峠 湯平より西水乃る小壺精沃と唱ふる溪間に徑を設

の路を傳ひ初率一里半の峰を經て峠に到る金精乃社をハ一里あり

又よりまゝ半里を定めて峠あり金精橋現と稱する小祠あり祭

神あり是は往古何りの納るるもや初小減令せし男根をりて神

神と昔中古より自抗は男女交合の形に出来たる古木の根株

を納るるを法顯を祈る事ありといひ傳ふは社を湯亭のりて

おとまり初は株の古名を檝株なり和名抄小本枝相交下陰を檝

といふと云ふされをみ者相通しけるよりして一法一のきり味

と稱せるなり茲の山中丹肉蕨蓉多く生ずるをさしゆの名をも

きり草と味は葷ハ茶品よりして能腎経を補助するものなれば

とく何そのの蕨小陽物を祀りて金精と稱し古名の檝を標として

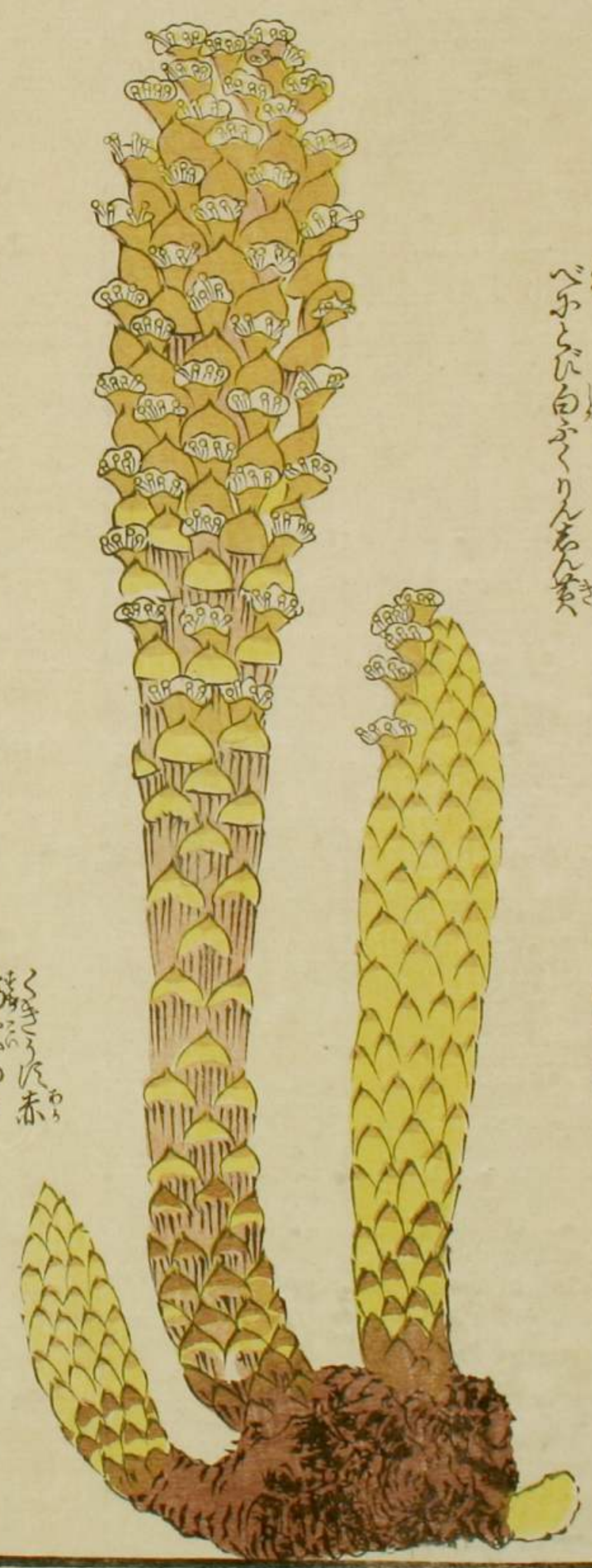
肉從蓉

初夏のすまみ生しそ色白く上に花のつく葉きまらるりのを赤し

花 べふら白ざりんあん

うんき色

湖子 野野



丸葉 赤
鱗 赤
鱗 赤

白

き切らと唱より今ハ又精撰してきむのむの香をまに替て
 鄂劣の唱へを替ること葉小葉きにわらびやされをそみ香に通
 用するより記述又は味を上野下其の國界に接して茲より
 西乃方へ下るを四里許の嶮路と論て上員沼田に近き小川村と
 つかふむ人境を去られしる山道より更より裁後へ免内け里と
 いり帯に人れを行なり

赤白根山 湯平より乾ふ苗又赤根沃とつか西ハ湯平北西の旁に
 つか沃より登はわらび小連る山岳を是も白根山に直り出る
 峰密なる赤白根を頂上を九之里許六月あたるを谷く凍雪あり
 消やくは湯屋より香あがり登夏の時も赤白香を空り電山を
 るよをま儘くくは成陸を行くと或八十町又六十町も嶮攀し尖岩
 と踏く漸く電りて赤白根山の頂上へ至る又赤白根山は実元と



白根山

白根葵 しろねあひ



四ノ四十一

椿山人寫 しんざんじん
生 せい
平弼 へいへき



西は特立一皆石山より樹木更は生ぜば前白根乃頂上より昇降
して此の山とす一里あり実不美山とす岩石雨に若松と稱せ
るものみ一面不生の茂里花咲夏月雲を結へり大さ巨より少く
色赤く熟き丹頂花と好く熟き一以むれ来りて其美をそり
てゆき残りて若松を若の好る葉を遊を延敷と保つてて茶屋か
りといふ絶頂日光燈現成記述る社有り茲にて白根燈現と崇む
社を産銅より造り承元年産銅の跡を以山嶺焼出せし八慶
安二年のことあり震動日と經て不出尚山
所産皇命とむし新宮持殿より八幡市修行成を妙典と稱せしを
みひたるま時絶頂燒破赤沼系色く燒灰二三尺餘積り上段又ハ
余津谷にも降る由燒破道一町二町の岩穴とあり深さ何十丈
といふことを若くは往昔より勅法有りし宮も以時窟中へ偏る

けり由志産銅小造りて奉納すといふこと以嶽を上野下野の國界
小く上段の方ある八分目と覺しき而は社有り爰を上段又ハ乃
地より被去りて荒山燈現と崇め祀り生土社とて毎多若松
と書るとはる由志滿より取らる新末と若くは携へて各社よ
り往連と曳たる如く清い合をて兼をはり附らるること其數多け
ば何と名をて此山をきくより其時を布あど引入らるやうとぞ
見えける若松を是も尚雨の徳林と曰辨りて社号れかを遊るもの
とぞ少るさ以遊を峻嶽と名ふその由來乃このより絶頂とを
尚國の地よりして山乃八分目より為此のこを彼國の地たる由以
山岳よりて尚國乃場とはと花根嶺ハ言れ由志乃小産旁掩ひ小
風動くれを新社の山と巨岩と聚てたみ揚らる由志岩室の
内小社と造りて如くに石の四方八面をそりて土人白根嶽ハ

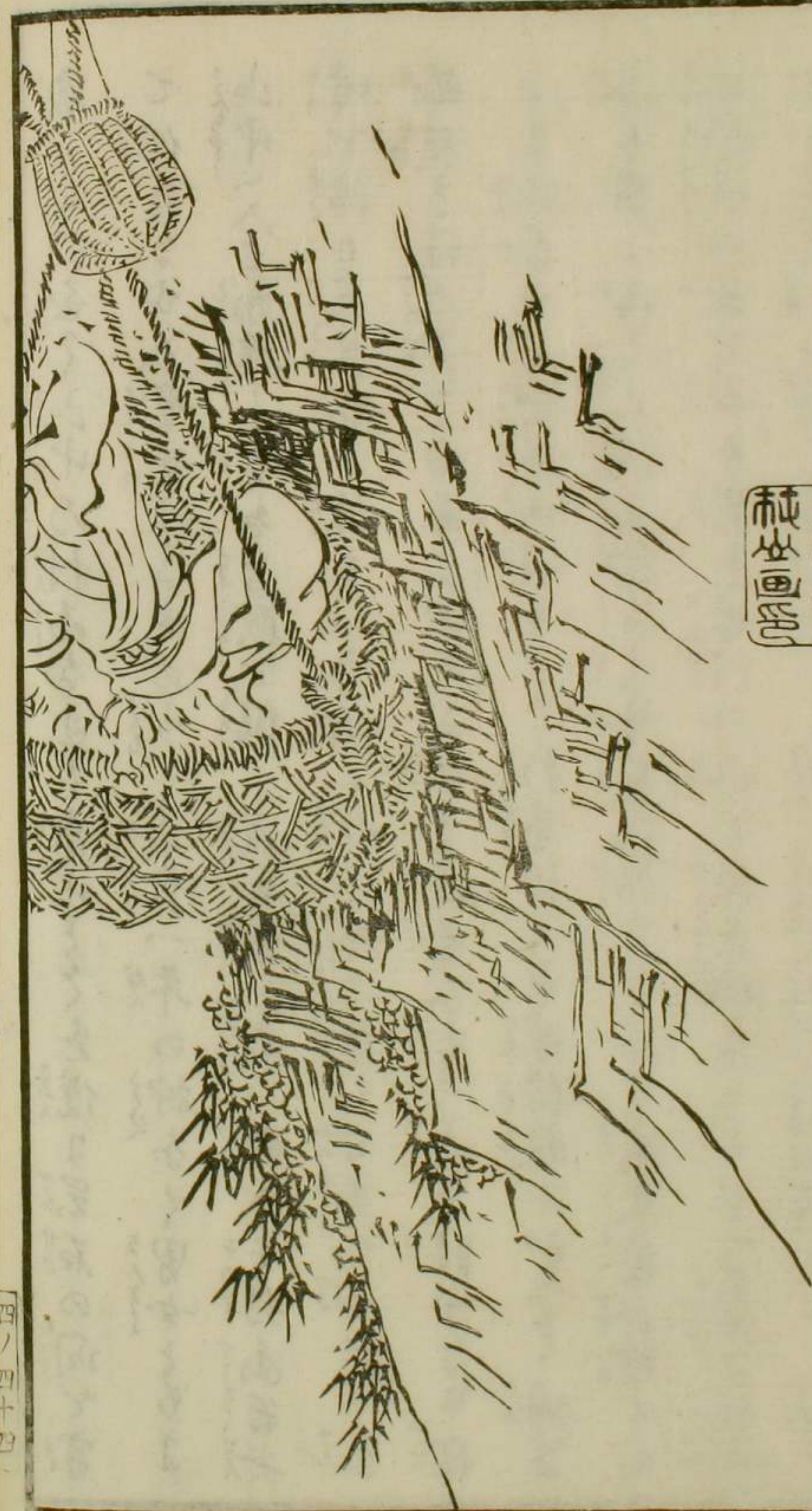
男辨山乃栗院なりと云いり山乃中後を悉獲製成すの樅杵多々
樹蔭の處に名産と稱する白根人参或は白根葵白根葉等其乃
其等珍木多く茶品と云ふ其の英連成初と一枚葉一がこ一壹岳
由是容易に光臨する處と云ふさば傳へり小嶽小齋者といふ
畜すみける由を形と見るとをあげて道と標頂をいりの折ふ
糞なりと云う拾ひ得る處より砂麝香あといふそのより殊小香
乳すさまり実小被畜の糞あるや其形成見守布ききなり阿弥
陀佛を前白根と栗白根乃間小なり

栗山郷 十ヶ村塩谷郡あり 西川 日向 湯西川 土呂郡
上栗山 下栗山 野門 川俣 川治等乃村々之河山内
道より水の方如空山の裏小あり如空と男辨の畠ある函谷成
徑より富士足跡といふ峻山と踰て行く村居の削々たる年時も知

倉より山に至り山中乃村居を道に南北と云うる僅に岩石の間を穿
て此道より急登実するその少く之合一年の狩なく男女とも
山中へ入て勅擧げ男を多獸を獵し或は喰ひ或は販き其餘函谷尖
崎と流り岩葺あど揉も有り木を伐り板小撓て日光へ出たり山
路狭き棧乃多き由是之四尺小切り脊負ひ出たり或は結する由
ゆる北より由急峻路崎嶇と云うる行易なり其皆稲穀しかへり降る
冬を家より居り本辨木抄子本後爲成此るを何と云ふ粟山桶とて
曲物造の器と出たり是を管川の水と汲免桶多りといふ兒女も短襦
をまといひ山へ入り妻木と云う時は皆て椽実栗子多々道を先と
拾て倉物の役と云ふ又栗山の長なるそのを頂を不利傳へり古
平家の餘教の比山中へ隠れし所なり氏を小松と稱する由されども
家藏と云ふ古文書古器あつたを云う是を粟由も定りあり

栗山深谷岩茸取

椿山外史



所々温液

板室 日光より東に約十二里
中殿の形あり

福和田 右小間

滝 滝村のり日光より東の方
約六里に流るる

湯西 栗山の内湯田子
あり

足尾峠

昇降一里宛あり日光の方へ東に下りて細尾村へ出ず
又より清滝村と運り日光山内へ至る約二里修味乃絶頂に茶店

一字為小正あり坤北方へ下れば清滝とて足尾に新梨子村小原迄

山村あり夏の谷奥中禊寺乃湖水乃南の方より新向より涌出せ

る谷川清滝乃池より流るる由是南流して利根川へ灌漑するを

清滝門と稱するいり道あり味の下より以川と論り足尾村を二里

味より西に里あり又味より清滝の乾く處より足尾池に在り

中禊寺又湯元へ往及する處より一里半許りて湖水乃

南岸橋を渡して中禊寺別荘に池へ至る又南岸を傳ひ新赤

沼系へ出づ湯元を至る處ありと先多利寺と巧むりのありて中

禊寺乃湯へ婦人と浴せさせんとて我謀り許容ありを温泉も繁

業すべしと路次より上原筋より足尾峠へ掛り以道と湯元へ往來

せを女人半の禁制の中禊寺へ出ず日光町筋より清滝細尾へ

掛り足尾峠より以池と以時を返村へ先出次湯元へ至るとて

其乃と肉く切開き利安と運りこれとを湖水の南岸を花供人

の初めより下りて秋濱を初免奉り孫頂の法する者も河邊を絶

てありざるのみなりとて由池ありて子やとつとつを必きとなり

足尾郷

日光山内より西に約六里許り新赤と唱ふは新赤
郷は新赤足尾十回十村を上下に分つ古を新梨子赤沢の二村と足尾

塩原

荒井 右小間

川俣 栗山の女鏡山の北にあり

日光澤 栗山の内より二里山奥に

日光山内へ至る約二里修味乃絶頂に茶店

一字為小正あり坤北方へ下れば清滝とて足尾に新梨子村小原迄

山村あり夏の谷奥中禊寺乃湖水乃南の方より新向より涌出せ

る谷川清滝乃池より流るる由是南流して利根川へ灌漑するを

清滝門と稱するいり道あり味の下より以川と論り足尾村を二里

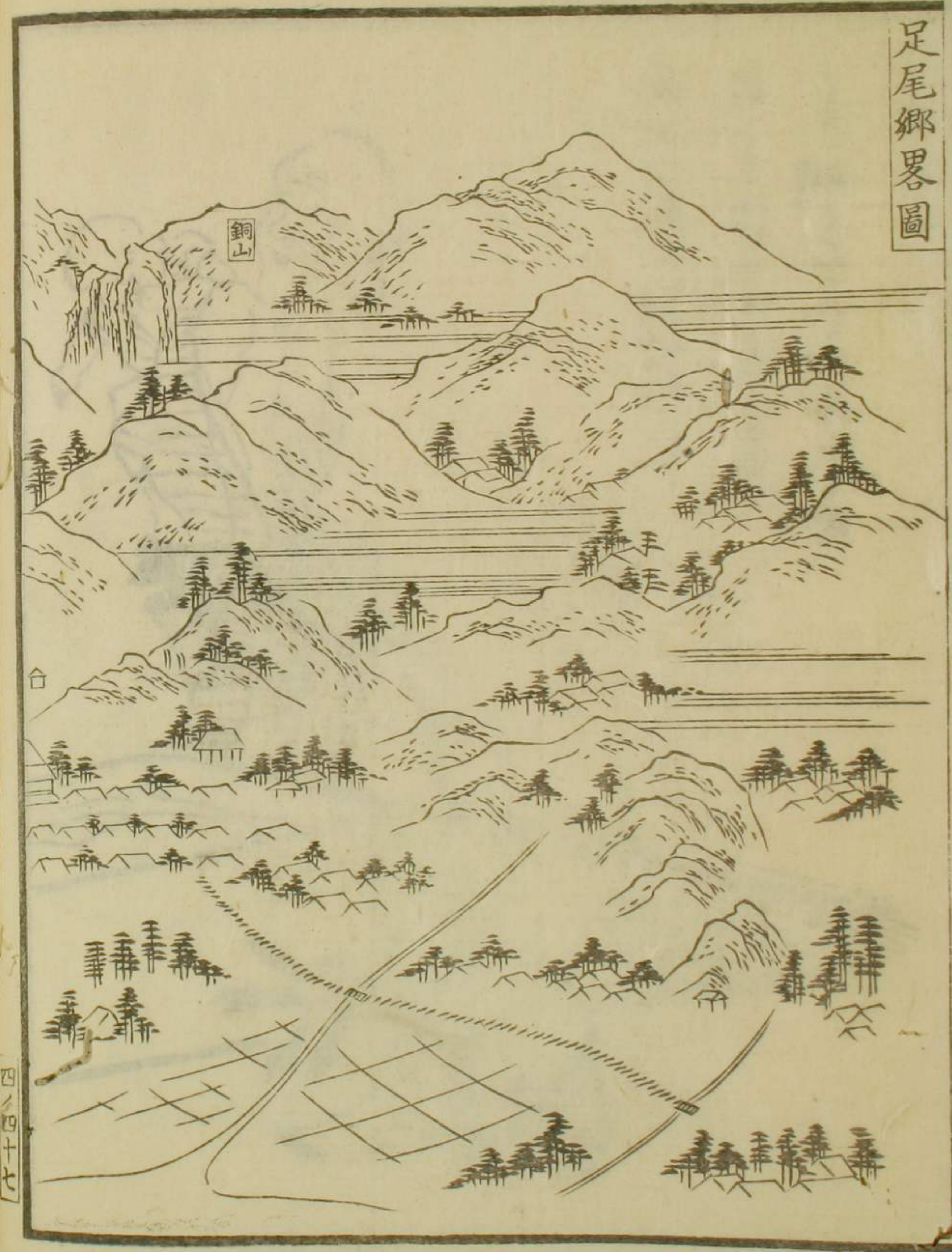
味より西に里あり又味より清滝の乾く處より足尾池に在り

羽塚の妻子皆を布をぬの
 梅うめとるとる 梅子袴うめこはかまといふものや
 手て羽はと石いしとを沙すな汰たする圖ず

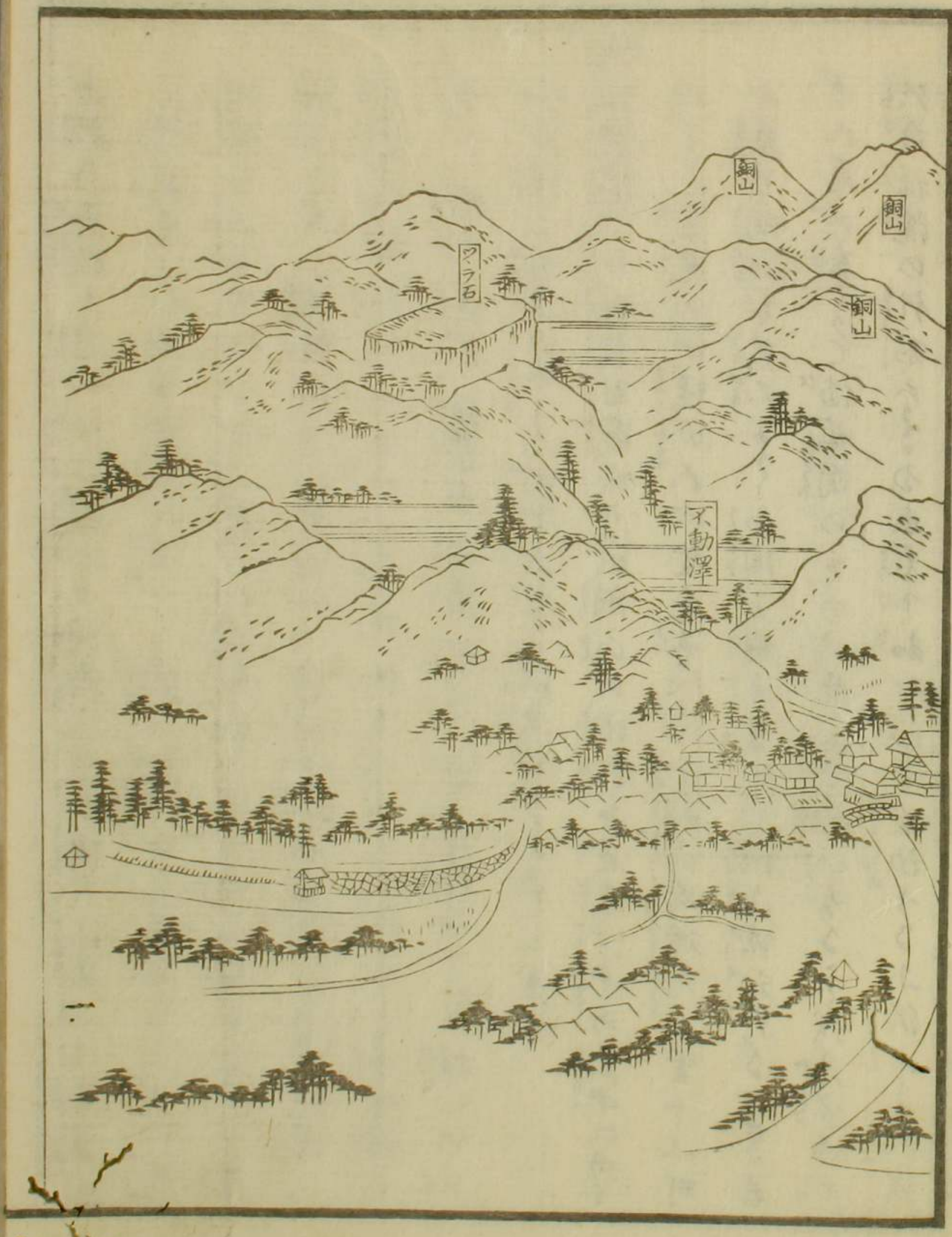


一鳳

足尾郷畧圖



四四十七



不動澤

千部乃戸教と唱へ羽山諸山の潤蓋河る小依く法園より来集
 て繁栄を以て延享寛延の末より漸く衰て今も家数も二百戸許
 村居る山谷の地也志山葉小村民家居る二條の路を南小一途
 以る有あり廣使東西三里南小一里許を十四ヶ村といふを間友
 赤倉久慈松本仁田元高木本神子内以この村と上分の村と
 唱ふ掛水赤沢新梨子中居を下系巻風呂以この村と下
 分の村と唱ふは下より羽を吐せる沢次河り上段二里

羽山濫觴古坑敷百竅有りは羽山の地取を足尾山中の末中は何
 山より足尾の口境外六六里毛有へ一系羽山周廻九三里十八町
 小直り羽山を志不みり山頂は樹木生ぜず羽山岨初たるハ芝長
 十六年の事とて備前國のその地一系羽山有る一系又室町
 以産孫院の於而たる也志下系を以て羽初たる小沢は羽城

羽城の向吹羽と公廳一系一以

清三代將軍家初く清袴百をり一系羽山悦乃折りり也志吉子
 る羽山との事はより清用山とあり貢賦の事ハ日光の支配
 をれど羽山を清代友乃指揮とあり智く支配一系保享中係借清
 下合皆莫大のこたくなり又元文の初は清羽羽乃介小掃掃庭被
 竹付暫掃掃吹立ける中掃乃裏小足字成中志一を交りて掃造
 せりのありを以來を下合お上保吹小吹交り羽山表傲一
 掃掃庭を清免を吹ひ掃園窮あ及がり一系今も羽山表傲清代
 友掛りりり陣屋有て手代在任はる一系今も羽山表傲清代
 又志一係系乃其の大は貨殖一國一掃一系一掃一系一掃一系
 子村の澤去宗より大園と以る地内へ石碑造立一掃一系一掃一系
 と銘一垂るるの今を志下系也志寺も荒蕪一系一掃一系一掃一系

山中銅穴圖



湖子





足尾村不動澤

十四圖

知造より由通時之陣屋の例小羽吹か小倉曰六戸お双なり
 银山 只尾町より西小羽より二里餘北に曰六町程ある場所なり
 鉛山を日光

所門之河持山とある通り軍上を奪り村民稼の山あり一と今ハ
 鉛山より由通時之陣屋と云ふ所は司るそのを命し重なり

庚申山 是を町方より西北に約三里許に山を自然なる奇石種々

天造の如くある形積をなせし道き比より山中に奇蹟なる園と

撰刻し遊説するを乃河造を古人等誘引せり或を以て此山中より

白猿一匹を欠る由是庚申山と名唱し又ハ猿の津古とも稱せしり

日光諸處の名産

銅 巨尾より出 銀 上と同 熊膽 熊皮 是も巨尾を産する所なり

蠟石 日光諸處の石を細くすり小造るるハ巨尾山中より

飛禽

慈悲心鳥 山鳥の翼をとり中條を又と栗山産にすあり河内にも

駒鳥 是は山にすあり 山鶴 山鴨 岩燕 鷓鴣 山鳥不すありの

龍氣 飛鳥にありぬと能く飛り

魚鱗

鱧 鱧 岩魚 大谷川に産す

薬品

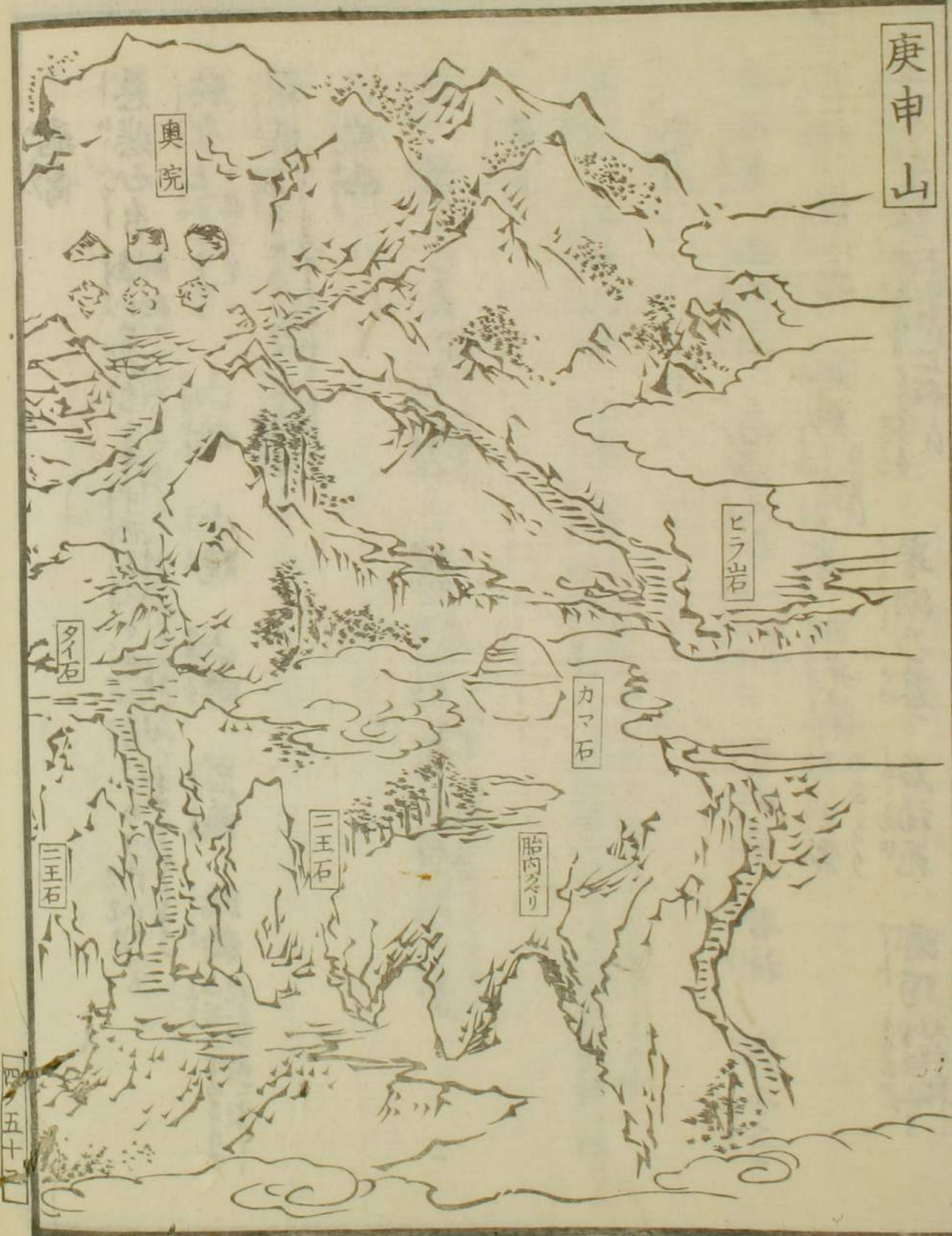
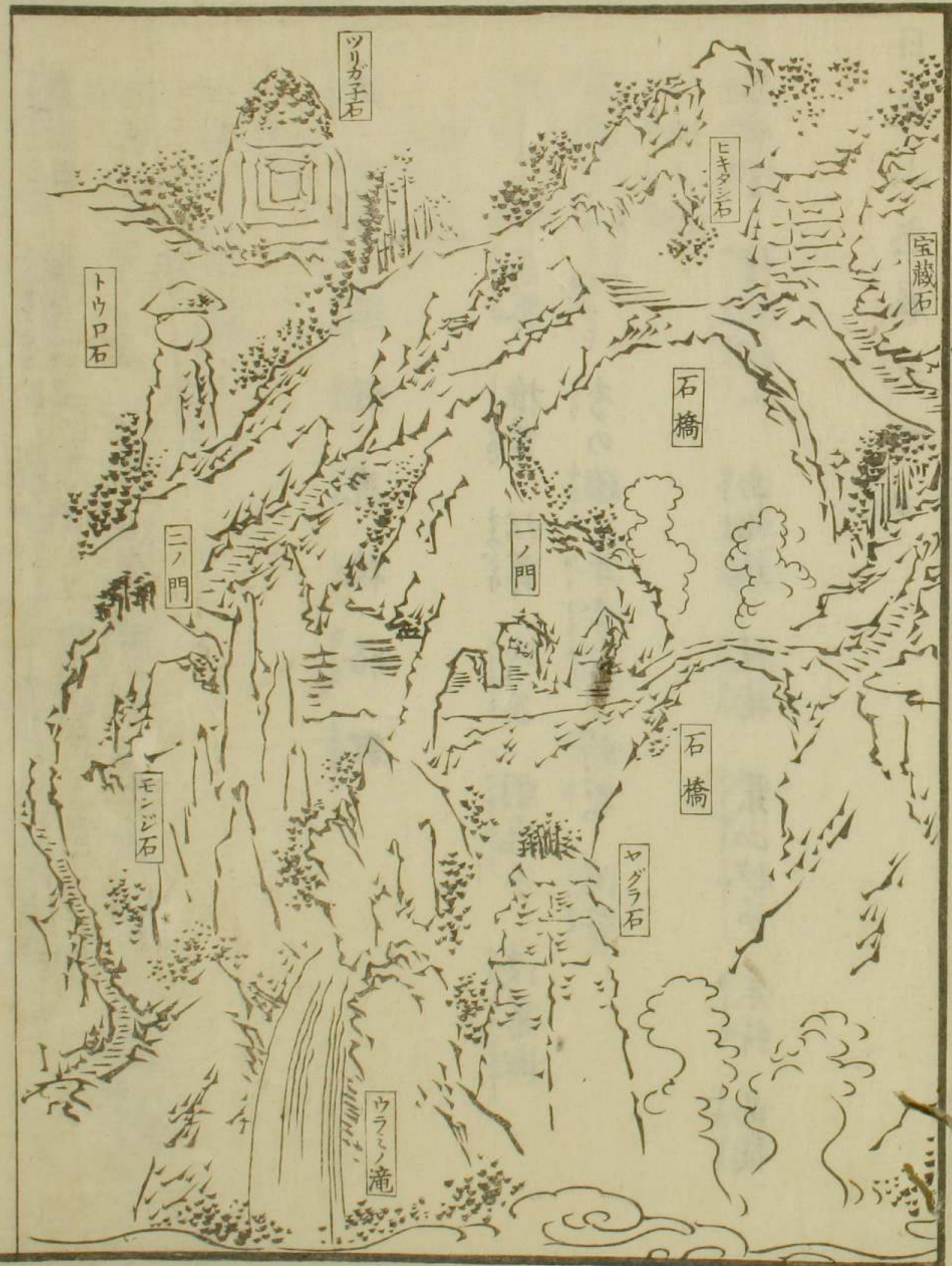
黄連 直根人參 日光人參 山生魚 是を西の山中岩門に生じ

草木

白根菜 白根菌 白根人參 各白根山 雪割草 苦枥 岩子香

岩鏡 櫻く顔 梅樞 日光蘭 日光蘭 石楠花

千手かんひ 夢湖乃夢 躑躅



熊谷系 敷盤系 この系に修るものありお種と一雨に裁り時ハ果して
 緋梅 此の系に修るものあり男梅 白梅 唐松 姫小松 虎の尾松 此の系に修るものあり
 沙羅樹 此の系に修るものあり中後寺

走獸

熊 羚羊 狼 猪 鹿 猿 貉 狸

飲食類

岩茸 獅子茸 推茸 松茸 栗子 胡鬼子 漬蕃椒

湯瀟 此の系に修るものあり 冬の醢 平索麩 婿菜 陸釐

細工物

春慶塗 指物細工 曲物類 挽物 栗山抄子 木鉸 曲柄

日光山志卷之四終

